

山名

源矩豊

第6号





山名赤松両陣供養塔



役員会 (H25/12・京都「阿じろ」)



理事会 (H26/5・六孫王神社社会館)



第二回 全国山名氏一族会総会 昭和62年5月16・17日 於 京都・妙心寺・花園会館

第2回全国山名会総会 (S62年5月妙心寺花園会館・60名参加)

猿尾滝観瀑図（文鶴画）



山名蔵收藏の文鶴画

「梅に鶴」(文鶴画)



今回奉納された掛け軸

村岡山名七代・山名義徳公（雅号：文鶴）掛け軸奉納

山名蔵がある香美町の吉田二雄氏（小代区秋岡）から同家に伝わる文鶴画『梅に鶴』を奉納頂きました。吉田氏のお話では、「骨董集めが趣味の曾祖父が明治の始めに手に入れた物」とか、入手された際の裏書きには興味深い内容が記されていました。（続きは本稿で）



「山名会幟寄贈」(相模原市草山宏理事)



多田神社 萬灯会献灯

毎年八月下旬に催される多田神社(川西市)の萬灯会に本年は協賛させて戴きました。



清和源氏諸流略系図

第20回総会時に作成した系図、まだ沢山御座います。最近よく見かける『手拭い用額』に納めるとしっかりと落ち着きます。



山名会会員章

配賦品のご案内

- 「山名会会員章」 ¥2,000 円
- 「清和源氏諸流略系図」
¥1,000 円

共に在庫が御座います。ご入り用には事務局までご連絡下さい。

第21回総会記念品のテープカッターは総会終了後、在庫が御座いましたらお分け致します。



第21回総会記念品

第21回総会記念品は「木製小型テープカッター台」です。樺材と山桑材があります。(写真は山桑材)

会誌「山名」第6号目次

第20回総会写真

文鶴画「猿尾滝観瀑図」「梅に鶴」等

天朝を滅亡の淵から救い出した山名一族

壺井八幡宮再建の記

山名氏編年史の考証

「山名」に関わる調査分析

年々歳々花相似 歳々年々人不同

文鶴画「梅に鶴」奉納

山名会の幟作成

編集後記にかえて

宮田靖国

三王紀将

山名年浩

山名一男

山名義範

2 9 12 65 69 71 71 72

天朝を滅亡の淵から救い出した山名一族

宮田靖國

永徳三（1383）年二月十五日、「後愚昧記」には次のように記載されている。

「今夜、資康、仲光卿等為左府使參仙洞。而無御対面、入御御持仏堂。可被切御腹之旨、被仰之云々。是為武家。可奉配流之旨、依有荒説、如此被仰歟云々。——中略——今夜、京中下辺、依此事騒動云々。」

これは、以前から足利義満が後円融上皇を島流しにしようとしている、との巷説が流れていたもので、左府（義満）の使者が仙洞御所に来た時、上皇は自分を捕らえて島流しにするために来た、との脅迫観念の為、即座に自刃せん、とされたのである。なぜなら、観応の擾乱で、光厳上皇、光明天皇、崇光天皇、東宮直仁親王が、持明院殿から南軍によって拉致され、遠く賀名生へ連行され、幽閉された。その幾星霜の艱難辛苦の言い伝えが、生々しく脳裏に蘇えったからである。

ではなぜ、上皇と義満との確執が、かくも危機的な極限状態に達したかといえ、上皇が幼い後小松天皇に譲位した時、即ち、三種の神器を受け継ぐ踐祚は四月十一日に終わっていたが、即位式は後に行われるのが桓武天皇以来の通例であつた

ので、摂政二条良基と左大臣義満が、後円融上皇に一言の相談もせず、二人で勝手に決めてしまつたので、上皇の逆鱗に触れたのである。

なぜなら、上皇は治天の君であり、又、朝家の大事を家来が主人の意向も聞かずに決定するとは言語道断と激怒されたのである。結局、勅許の無いままの即位式となつた。「良賢真人記」に曰く、

（永徳二年）十二月二十八日、今日御即位也。

天皇御高御座。左大臣候御帳中。為被扶持也。

今日御即位事、仙洞更無御口入。摂政殿、左

大臣兩人被令申行之。」と。

後円融上皇の堪忍袋の緒が切れたのは、永徳三年正月二十九日の父帝である後光厳院宸忌に、廷臣達が義満の機嫌を恐れ、出仕しなかつたからである。「後愚昧記」に曰く、

「二十九日、後光厳院聖忌也。然而云御八講。

云御経供養。不及被行之。人々恐武家時宜、

不出仕之故歟。」と。

では、なぜ公家の人々が義満の意向を恐れるのかと言え、かつて義満が左大臣になつて初めて参内する時に、廷臣はこぞつて内裏の四足門に出て義満を出迎えた。ところが、気骨のある五人の

朝臣は出迎えなかった。すると義満は即刻、五人の「召名」を止め、持明院基明に至つては出家遁世を余儀なくされたからである。

さて、この後円融上皇の焦眉の急を告げる事態に、前関白近衛道嗣は身を挺して北朝（持明院統）の救出に知恵を絞つた。なぜなら持明院家とは藤原道長の次男頼宗の系統であり、後高倉院以降、ここは歴代の仙洞御所となつた。つまり、後円融上皇も院政を行い、治天の君なのである。それが、あろうことか、義満によつて滅ぼされようとしているのである。上皇が天皇の時は、関白として仕えた近衛道嗣との関係は良好であつた。それは持明院家の保藤は近衛家の出自だからである。且つ、保藤の娘は内大臣洞院実夏の室であり、あの尊卑分脈を書いた洞院公定の母なのである。又、その妹は近衛道嗣の北政所であつた。その上、保藤の孫、持明院保脩（やすなが）の娘は山名陸奥守氏清の正室であつた。実を言えば、近衛道嗣の北政所は実夏の娘ではなく、南朝左大臣洞院実世、つまり、実夏の兄の娘であつた。

わかりやすく言えば、近衛道嗣は妻を通じて南朝と連絡をとることができたのである。故に道嗣は、義満を一刻でも早く抹殺しなければならぬと考え、その誅殺役として山名氏清に白羽の矢を立てたのである。かくて南朝から「義満を誅戮すべし」との綸旨を氏清に下されるよう極秘裏に工作する一方で、持明院家を通じ、氏清に直接、北朝

の院宣を伝えたのである。

南朝は真偽の程を疑い、院政を行う長慶上皇と後龜山天皇との間で、意見の一致を見るのに歳月を要した。が、ついに長慶上皇は高野山と紀伊国天野の丹生明神に、元中二（1385）年九月十日、「右、今度之雌雄、思いの如くば殊に報賽之誠を致すべし」との御願文を太上天皇寛成と自署して納められた。紀伊は氏清の兄である義理の領国であるから、山名一族への証文であらう。

氏清は南朝から、義満を討伐すべし、との綸旨を賜つたが、それよりも前に、北朝から義満を誅戮すべし、との院宣を秘密に下されていたので、即刻、挙兵すれば、本当は北朝からの命令で決起した、と義満に見破られる恐れがあつたから、千載一遇の好機を待たざるをえなかつた。

つまり、万一、敗戦となつた時に、氏清の掲げた錦旗は北朝が授けたのだ、と義満が勘繰れば、北朝は一瞬にして滅ぼされことは火を見るよりも明らかだつた。果たせるかな、ついに、その時機が到来した。

「南方紀伝下」に曰く、

「十一月、停満幸出雲守護職、罪横領仙洞御領也。満幸勸氏清企謀叛、満幸者氏清甥而又婿也。將軍赦時熙氏幸、同十日、因幡堂炎上、山名催一家參南朝、欲攻京都、南帝命春日刑部少輔頭連賜錦御旗、云々」と。

この仙洞御領横領云々は、義満が山名一族に仕

掛けた陰謀だった。なるほど、出雲国横田庄は仙洞御領で間違いはないが、問題は代官の日野資教は義満の手下なのである。だから、満幸が横田庄から、資教の家人を追いつ出した、と訴えられたが、小守護代の村主美作守を満幸が呼び出し、尋問したところ、事実無根であることが判明した。根も葉もないことをデッチあげて、義満は一族の棟梁である氏清を挑発したのである。氏清はまさにこれ wait っていたのだ。之こそ、治天の君の御宸襟を安んじ奉る千載一遇の好機ととらえた。つまり、義満が仙洞御領を口実にする限り、氏清が仙洞からの命で決起したとは義満も露ほども疑わないうであらう。加之、甥にして娘婿である時熙は今、義満側にある。これは時熙が自発的に義満側に身を投じたのか、あるいは氏清の深謀遠慮なる指示によるかは不明である。しかし、これで後顧の憂いなく、近衛道嗣の伝えた院宣に応えることができる、と氏清は考えた。たとえ、山名一族が全滅しようとも、天朝の身代わりとなることができるならば、一族にとつて、これほどの名譽はない。大逆罪の限りを尽くす義満のみを抹殺せんと、玉碎しようとも、悠久の大義のために乾坤一擲の戦いに臨んだのである。

ただひたすら天朝の安泰を念じて、天長地久時ありて尽きるとも、天朝だけは神の如く正義の如く、未来永劫に神国日本にしらしめられんことを祈りつつ、山名氏清は十一ヶ国の義兵を率いて、

大内裏の跡である内野に、巨大な毒蛇の如くとぐろを巻く義満の大軍を強襲した。時に明德二（1391）年十二月三十日の払暁であった。

満を持して矢は放たれた。突撃は熾烈を極め、激闘につぐ激闘であり、死闘に告ぐ死闘であった。人馬いやが上にも死に重なりて血河屍山を築きつつも、いつ果てるとも見えず、氏清自ら白刃を振るって流矢を顧みず敵陣に突入した。龍攘虎搏を展開すれども、敵は天下の大兵、ついに衆寡敵せず、山名の義軍は一敗地に塗れたのである。嗚呼、忠臣氏清の身は散華すれども、魂魄はとこしえなえに、称えられ崇められるであらう。そう戒名に表現されている、氏清の戒名は宗鑑寺殿古鑑衡公大居士。

この意味は、全ての人の鑑（手本）であり、古来より今日まで、いかなる鑑「手本」となる偉人が居たとしても、氏清より偉大なる人物は居ない。なぜなら、有史以来初めて天皇家を救ったのだから、という含意である。おそろく、天朝の側近から賜ったのであらう。おおよそ、戒名に同じ漢字を二度も使うことは無いからである。

氏清の辞世の句は、

取りえずば消えぬと思へ梓弓

引きて帰らぬ道芝の露

（この取るは天下をでは無く、義満の首級を、である）

御台（左近衛中将・持明院保脩女）の辞世、

沈むとも同じく越む、待てしばし

苦しき海の夢の浮橋

氏清の正室のこの覚悟を読むと、北朝の密勅、即ち、大逆罪を犯す義満の首級をあげよ、という院宣は近衛道嗣から御台を通して氏清に伝えられたのであろう。近衛道嗣は尊卑分脉によれば、至徳四（1387）年三月十七日に薨去している。つまり、氏清陣没の三年前であるが、おそらく死の直前まで氏清に決起を促し続けたのであろう。氏清の討ち死に後、御台は湯水を断つて、この二首の辞世を胸の上で組んだ手に握り締め、明徳三年正月十三日の暮れほどに、ついにむなしく亡くなった。

さて、その後の義満の悪逆の振る舞いを見ていくと、まず、南北朝の合一に乗り出した。

南朝が存在すると、義満を朝敵として錦の御旗が下されるからである。四か条の講和条件を提示し三種の神器を北朝に帰座させたが、何一つとして実行しなかった。完全に詐欺であった。南朝に与えたと約束した全国の国衙領はほとんど無きに等しかった。ましてや、両統迭立の如きは実施するつもりは毛頭なかった。

ともあれ、明徳三年閏十月五日、神器は土御門東洞院の皇居の内侍所に鎮座し、五十六年ぶりに皇統は帰一したが、治天の君である後円融上皇の懊悩は増すばかりであった。なぜなら、義満の僭上と独裁は増大し、皇統が断絶させられるか、皇

位が篡奪されるのではないかと煩悶されたからである。

治天の君は蒲柳の質ではないが繊細であるが故に、何事にも鋭敏であらせられた。故に皇家が、前代未聞、空前絶後、天地開闢以来初めて、絶体絶命の窮地に陥つたことを肌で感じ取られたのである。つまり、後鳥羽上皇や後醍醐天皇は北条幕府によつて島流しにされたけれども、北条氏は天皇家を廃絶しようとは露ほども考えなかったのである。誰もそれは思いもしないことであつた。人は、弓削の道鏡がいたではないか、と反論するかもしれないが、道鏡は天智天皇の孫である。

故に、日本史上、初めて天皇家の絶滅を虎視眈々と狙つていたのは義満のみであつた。それを直感され、絶望の極、南北朝合体から僅か六ヵ月後に後円融上皇は登霞された。時に明徳四（1393）年四月二十六日であり、まだ三十四歳の若さであつた。洞院公定も上皇の後を追うかのように薨去している。その著書である尊卑分脉の中で、氏清の上に註して、「南帝の勅命を蒙むるの由、自称」と書いたのは、北朝からの勅命では決して無い、と義満が後円融上皇への猜疑心を起こすことのないように配慮したのであろう。

さて、治天の君である後円融上皇が登霞されるとき、義満は上皇が恐れられていた通りの悪鬼の如き本性を剥き出しにし始めた。既に永徳三（1383）年六月二十六日、義満は摂政でもなく関白

でもなく、いわんや帝の外祖父でもないのに、左大臣の身で、しかも武家でありながら准三后の宣下を受け、宮廷の実権を手中に収めていたので、単刀直入に言えば、皇位篡奪の挙に出たのである。

つまり、国際的に日本国王と認知されれば、篡奪の正当性の証左となる、と義満は考えたのである。目的遂行の為に義満が打った悪逆の策は、明の皇帝に上表文を奉ることであつた。

応永四（1397）年、義満は明に使いを送り、「日本准三后源道義、書を大明皇帝陛下に上（たてまつ）る。」と書いた。二代皇帝建文帝の返詔には、「茲（こゝ）に爾（なんじ）日本国王源道義、云々」という文言が入つていた。これでも義満は満足せず、応永十（1403）年二月付の永楽帝への上表文で、「日本国王臣源表す。臣聞く、云々」で始め、署名も亦、「日本国王臣源」であつた。臣の字を何度も使つたのは、明の皇帝には臣事するが、日本の天皇には臣従しない、という決意が透けて見える。

次いで、諒闇（りようあん）にかこつけて、義満は後小松帝一代の治世に二度の諒闇は不吉である、と言ひ募り、応永十三（1406）年十二月二十七日、義満の正室である日野康子を准母とする勅書を出さしめた。

諒闇とは天皇の父母の死に際し、喪に服することであるが、一代で二度の諒闇は、もともと奇瑞だとされていた。しかるに義満は凶兆だと主張し、

国母である藤原（三条）厳子は死んだが、准母を置くことによつて、凶を吉に転換できるとしたのである。しかし、これこそ天皇家にとつて、最悪の極限状態に突入することになった。つまり、これで義満は准父（准国父）、即ち、天皇の父に准じ、准上皇ということになるのである。

かくて、風雲急を告げて、地上の悪鬼は天界の神に挑みかかった。翌年の応永十五（1408）年は、天皇家にとつて空前絶後の危急存亡の秋となり、まさに風前の灯であつた。

二月二十七日、義満の次男義嗣が未だ十四歳で元服前だというのに参内したのである。これは義満を上皇と見立てて、その皇位継承者に擬せられたのである。続いて三月八日から二十八日まで、後小松天皇に義満の北山第への行幸を仰ぎ、というよりは強制し、もう一度公卿全員に念を押すかのように、義満は天皇と同じ纏綯縁（うんげんべり）の畳に座つたのである。この纏綯縁の畳とは玉座のことで、天皇又は上皇以外、何人といえども用うべからざるものなのである。つまり、義満は朝廷の全員に、自分は上皇である、と宣言したのと同然であつた。

かくて、四月の二十五日、義満は最後の仕上げ、というより天上界の破壊を始めたのである。即ち、義嗣が内裏で元服するという、破天荒な極悪非道の暴挙に出たのである。今や義満は仮面をかなぐり捨て、悪魔の正体、いや、魍魎魍魎の如き妖怪

の姿を現したのである。伏見宮貞成親王の「椿葉記」に曰く、

「その四月に内裏にて元服して義嗣と名のらる。親王御元服の准拠なる由、聞こえし」と。

ここで、魔王が一撃を加えれば、即ち、後小松帝に禅譲を強要し、義嗣親王が即位すれば、天照大神の皇統は絶えてしまう。まさに断末魔の苦しみ、万事休す、という危機一髪のところ、大神は挑みかかった悪竜を電光石火、黒雲を突き破る稲光のごとく一瞬にして誅戮されたのであった。

即ち、義嗣が親王になった三日後、天佑神助があつて、義満は死の床に伏す、という奇跡が起きたのである。かくて、目出度く朝家は暗黒の闇に、天照大神の燦然たる日輪を仰ぎ見ることができた。これを天の配剤と言わずして、何といふべきか。兵書に曰く、

「己の徳を修めずして他人（ひと）より勝んとすれば、天、その魂を奪う」と。孟子の言にも、「力を以て仁を仮るは覇者たり。徳を以て仁を行うは王者たり」と、ある。義満には徳が無かつたのである。難しく言えば、「天のなせる災いは、なお避けるべし、自らなせる災いは逃（のが）るべからず」と「書経」にある。

しかし、神の怒りでないのならば、義満は毒殺されたことになる。ある人は毒を盛つたのは世阿弥であると言う。義満の子息である六代將軍義教が「故なくして世阿弥を佐渡島へ島流しにしたか

らだ」と言うのである。もし、世阿弥が犯人ならば、世阿弥に指示したのは、応永十五年四月二十日に関白を辞した一条経嗣かもしれない。彼は二条良基の子で、一条家へ養子に入つたのである。

その日記「荒暦」に、

「かくの如き大儀、勅問に及ばず群議に決せず、左右（そう）なく治定云々」と、

義満が天皇家の一大事を独断で決定したことに悲憤慷慨してゐたからである。

しかし、世阿弥は衣服盛つたかもしれないが、証拠は無い。そんな根拠の無いことよりも、ここに、重要な文面の四代將軍義持の御判御教書がある。発行されたのは、義満死後一年四ヵ月後のことである。曰く、

在「義持」御判

「丹波国宮田莊事、為大和国宇陀郡之替、且所宛行山名左近大夫將監入道調心也。然者早守先例、可致其沙汰之状如件。」

応永十六年九月五日」。

これが重要なのは四代將軍義持の判が押してあることである。義持は父義満が朝廷を乗っ取ることに怖気をふるつてゐた。おそらく、平重盛が父清盛に諫言したように、血涙を絞つて反対したのであるう、その結果、義持は激怒した義満から厳しく責められた。廃嫡寸前であつた。

ここに、重要人物が三人居る。一人は四代將軍義持。彼は義嗣が天皇になると、その前に平伏せ

ざるを得ず、それは兄として耐えられなかった。義嗣の内裏元服にしても、外回りの警護ばかりで、父や二十歳も離れた弟を相当恨んでいた。特に弟の義嗣への憎悪は凄まじく、義満が死ぬと義嗣は逃亡したが、義持は草の根を分けても捜し出せと厳命し、怒髪天を衝く如く、10年間も探索の手を緩めず、ついに九州まで追詰めて惨殺した。

二人目は、応永十五年四月二十日から応永十六年二月二十一日まで関白であった近衛忠嗣で近衛道嗣の孫である。藤原氏の氏の長者であった。関白近衛忠嗣は義満を抹殺せよとの密命を、家訓の如く受け継いで、不惜身命の覚悟で義満を誅殺すべく尽瘁した。近衛忠嗣は初め、良嗣と名乗っていたが、忠嗣と改名したのは天子に対する忠義と、義満抹殺への不退転の決意表明である。義満暗殺の晩には、丹波国の近衛家領である宮田荘を恩賞として与えると山名左近大夫将監に密約したのである。この宮田荘は忠仁公（清和天皇の外祖父・藤原良房）以来、特別に相伝してきた由緒ある莊園であった。いわば近衛家の家宝を山名氏に贈与したのは、近衛忠嗣の赤誠の表れであり、命令を実行した褒美であろう。ただ、不思議なことに、この宛行状は近衛家が所蔵し、今も尚、陽明文庫の中に現存することである。

そして、最後に山名左近大夫将監入道調心（宮田時清）は、山名陸奥守氏清の決別の言の葉「生き延びて本懷を遂ぐるべし」という遺命をまつと

うせんものと、千載一遇の好機を窺っていた。ここに三者は暗黙の了解で、人知れず便宜を図り、左近大夫将監が遺恨十六年、磨きに磨いた一剣を義満の上に振り下ろしたのである。義満は応永十五年四月二十八日、死の床に就き、五月六日の酉（とり）の刻（午後6時頃）事切れた。

しかしながら、義満の戒名は相国寺の過去帳には、「鹿苑太上天皇」とあり、同寺の「塔頭末派略記」には「玉竜庵は、嘉慶年中鹿苑上皇草創」と記し、また、臨川寺の位牌には、「鹿苑院太上法皇」とあり、鹿苑寺（金閣寺）の延宝六年造立の義満木像の銘には「近造刻鹿苑天皇尊像」とあるのである。ただ、先年、義満の墓である鹿苑院が同志社大学の構内から出土したのは、真に神の摂理とすべきであろう。

ところで、時熙公に付いて一言触れれば、義満側に付かれたのは、氏清の指示か、又は、阿吽の呼吸で一族を分けて、戦の庭に臨むのは、保元・平治の乱以降、清和源氏の常套手段であったからである。氏清陣没の僅か一年後に氏清の菩提寺・宗鑑寺を創建されたのが、その証左である。ちなみに時熙公の正室は氏清の娘で安清無染という。結局、左近大夫将監が拝領した宮田荘の宛行状には四代将軍義持の判が押してはあるが、本当は幕府の重鎮であった時熙公から与えられたのではなからうか、と私は推測している。

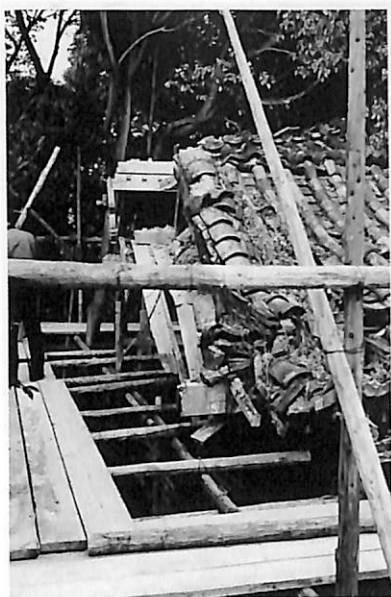
壺井八幡宮再建の記

— 壺井八幡宮再建にまつわる思い出 —

三王紀将

昭和62年頃、多田神社での会合の折りに、壺井八幡宮の故・高木保生宮司さんが私の席に来て「一度、壺井八幡宮に来て欲しい」と言われたので、余り気が進まなかったが一人お参りに寄せて頂いた。

高木宮司さんに案内されて神殿を見て、「びっくりのお化け屋敷やないか」、「こんな所に神様が居られる訳が無い・・・どうすりやいのか？」と考えるながら案内される儘、境内



荒廃した社殿

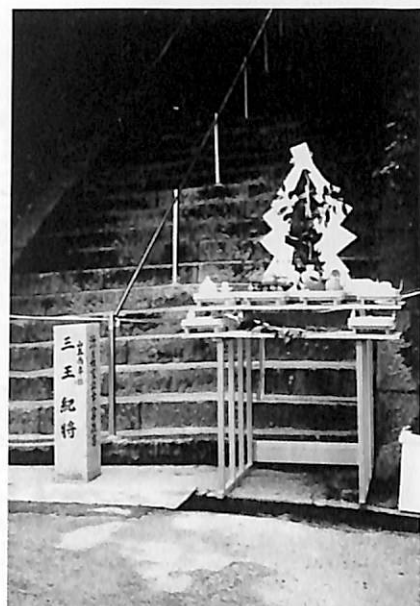
をあちこち見て回った。神社の正面、参道の石段の所に行くと、なりな急勾配の上、石積みも乱れ、上るの何とかならない。下りる時は怖くて足がなかな歩足を出ない。と下まで転げ外落ちる危険性があちる。このようなる状態では参詣する人も居ない。先ずはこの石段の修復からするべきである。と高木宮司さんと話し合い、結果として私（三王）が自費でこの石段の修復を行うこととし



参道（石段）の補修（S62/5）

た。

そして、石段の修復が完成すると、次は境内の整備。手始めとして境内にある大楠を「大阪みどりの百選」(大阪花万博記念事業)に通したい」と、高木宮司さんから提案を受ける。何でも500名以上の署名があれば当選するらしいので、ご協力をさせて頂き、私一人で550名分の署名を集めて当選を果たした。



改修された石段

参道・境内と整備が進むと、次は当然御神殿の建て替えを考えなければ成らない。費用は軽く3億円は掛かるらしい。「どうすれば3億円の資金が出来るのか・・・」

法律では古い社殿の柱を一部継ぎ足して再利用すれば、国が幾分か補助を出してくれ、と言うので、壺井八幡宮の地元大阪4区の利用議員でもあり、清和源氏の子孫である塩川正十郎氏がお居られるので高木宮司さん共々、自宅までお願いに出向いたりもした。幸い塩川氏も快く協力頂き、神殿建て替えの事業も順調に進んで行った。



「大阪みどりの百選」入選

神殿の建て替えも整い、境内に幟を揚げ、ポールを7本準備した。1本は国旗用とし、6本は山名氏をはじめ、武田氏・徳川氏・足利氏等の清和源氏各氏の幟を掲げる為だ。山名氏の幟は2枚作成して奉納させて頂いた。

参道・境内・神
 殿と整備や改修が
 整いの晴れて竣工披
 露の式典を迎えたこ
 のだが、残念なこ
 とが一つ。私としては清和
 源氏の流れを継ぐ
 山名氏後裔の一人
 として石段整備以
 降、壺井八幡宮の
 改修整備事業に人
 一倍力を傾け、精
 一杯尽くしてきた
 つもりなのだが、竣工披露の席には私をはじ
 め山名会役員の席が準備されていなかった。
 この数年我が事以上に、神社の整備発展を
 願ひ励んで来たつもりであつたが・・・
 祖神はあえて我々山名氏に苦難を与え、之
 を乗り越えよと言う思ひ召しか。



山名会の幟掲揚 (H7/10)



建替なった神殿

山名氏編年史の考証

— 清和源氏の形成から明徳の乱後まで —

山名年浩

850	嘉祥3年3月25日	惟仁親王（清和天皇）誕生。文徳天皇の第4子。母藤原良房の女、明子。	『尊卑分脈』
858	天安2年11月7日	清和天皇が即位（9歳）*1	『尊卑分脈』②家譜P1
874	貞観16年3月13日	貞純親王が誕生。*2清和天皇の第6皇子。母神祇伯中務大輔棟貞王の女。	②家譜P2
895	寛平7年2月15日	經基王が誕生。*3*4貞純親王の長男、母・右大臣源能の女	②家譜P3
909	延喜9年10月5日	經基王が元服、正六位上、左馬介に任ぜられ源朝臣姓を賜る。*5	②家譜P3
912	延喜12年4月10日	源満仲が誕生。源經基王の嫡子。母は武藏守藤原敦有の女。	②家譜P6
916	延喜16年5月7日	貞純親王が死去。	『尊卑分脈』
940	天慶3年2月8日 2月14日	平将門追討軍が編成され、經基王は副將軍となる。 藤原秀郷、平貞盛が平将門を滅ぼす。	『扶桑略記』①大日117 「将門純友東西軍記」①大日117
		經基王は駿河国清見ヶ関に至った日に、これを聞き帰路。	②家譜P4

*1、『山名家譜』には生年の記載はないが、天安2年に9歳であるから逆算すると嘉祥3年となり、『尊卑分脈』と一致している。

*2、『山名家譜』では、貞観16年誕生と成っているが、生没年について諸説がある。『尊卑分脈』では生年の記載はないが延喜16年（916）5月7日に64歳で薨じたところから逆算すると、仁寿2年（852）の

生まれとなる。すると父の清和天皇が2歳の時の誕生となる。

『系図纂要』では貞観15年（873）3月23日誕生となっており、延喜16年（916）5月7日44歳で薨じたところ。奥富敬之『清和源氏の全家系 天皇家と多田源氏』参照。

*3、『尊卑分脈』では天徳5年（961）11月4日45歳

で卒となつており逆算すると、延喜16年(916)誕生となる。これは父貞純親王の死去の年でもある。『系図纂要』では寛平9年(897)2月12日生まれとなる。

*4、

経基王は、清和天皇の第6皇子である貞純親王の子であり、清和天皇の孫にあたるから、『六孫王』と称したと伝えられている。『六孫王』の経基王は、のちに源姓を与えられて臣籍に降下し、いわゆる清和源氏の初代となつたと、一般的に強く信じられている。しかし、経基王(六孫王)は、清和源氏ではなく陽成源氏だとする説がある。

『史学雑誌』第11編第2号『六孫王ハ清和源氏ニ非ザルノ考』と題した論文で星野恒氏は『源頼信告文』を論拠として展開している。『源頼信告文』(『石清水文書』)の關係する箇所を抜粋すると、

敬しんで先祖の本系を煖め奉れば大菩薩の聖体は忝けなくも其が二十二世の氏祖也。

先人は新發(満仲)、その先きは経基、その先は元平親王、その先は陽成天皇、その先は清和天皇、その先は(中略)いわゆる曾祖陽成天皇は権現の18代の孫なり。頼信は、かの天皇の4世の孫なり。

となつてゐる。

すなわち、清和天皇—陽成天皇—元平天皇—経基王—満仲—頼信という系図になり、頼信は陽成天皇の4世

の孫ということになる。しかし、経基王が清和源氏の始祖であることに変わりはない。清和源氏についての研究者の奥富敬之氏は『清和源氏の全家系 天皇家と多田源氏』の中で、星野論文を紹介し、なぜ陽成天皇が貞純親王へ変えられたのかを、陽成天皇が暴逆な悪君として有名であるので、いわゆる清和源氏の人々が姓氏を偽証したと述べている。

*5、

生年不明、貞純親王の子、六孫王と呼ばれる。『尊卑分脈』では天徳5年(961)に64歳で死去となつてゐる。

書籍名の略称表示について

省頁の為、頻繁に登場する書籍名につきましては略称を使用しています。

略称	書籍名
①大日	『大日本史料』
②家譜	『山名家譜』
③守護辞典	『室町幕府守護職家辞典』
④氏清年譜	『山名陸奥守氏清公略年譜』
⑤南北朝史	『南北朝編年史』
⑥常熙年譜	『山名常熙関係略年譜』 (『山名常熙と禪刹』収集)

見づらいかと思いますがご理解下さい。(事務局)

940	天慶3年8月27日	藤原純友の追捕使として、小野好古を長官、経基王を次官とする。*6	「扶桑略記」(①大日17)
941	天慶4年6月20日 8月	経基王が帰郷する。正四位下に叙せられ、太宰大貳に任ぜられる。	
941	天慶4年6月20日 9月6日	藤原純友、警固使橘遠保に討たれる。	「本朝世紀」(①大日17)
961	天徳5年11月4日 (心平元年)	追捕使源経基、豊後国で海賊を破り、桑原生行を捕える。経基王が逝去。*7	「本朝世紀」(①大日17)
968	安和元年	源頼信が誕生。満仲の三男。母は大納言藤原元方の女。*8	「国史大辞典」
969	安和2年3月25日	源満仲、橘敏延等謀反の由を密告し、同27日正五位下に叙せられる。*9	『日本紀略』
970	安和3年3月 3月15日 (天禄元年)	源満仲が摂津守となる。 源満仲が多田庄に住する。	②家譜P6 *10 ②家譜P7
971	天禄2年	多田庄に一寺を建て鷹尾山法華三昧院(現在の多田院)と名付く。	②家譜P7 *11
986	寛和2年8月15日	源満仲が出家する。法名満慶。	②家譜P7、『尊卑分脈』
988	永延2年	源頼義が誕生。頼信の嫡男。母は修理命婦。	「国史大辞典」
997	長徳3年8月27日	源満仲が死去(86歳)。	「系図纂要」(①大日23)
1030	長元3年	源頼信に平忠常の追討を命じる。(これ以後、関東が清和源氏の本貫地となる。)	*12 「小右記」(『大日本古記録』)
1031	長元4年4月	源頼信上総介。平忠常追討の宣旨を賜わる。	②家譜P8
	9月 10月21日	源頼信、軍勢を引率いて武蔵国河越で、忠常の弟陸奥守忠頼・中村五郎忠将と戦う。忠頼兄弟、利なくして退く。	②家譜P8
		源頼信、大軍を率いて下総国に至り、千葉城を攻む。忠常降参せり。頼信、忠常を伴い帰路する途中、美濃にて忠常は病死。	
1038	長暦2年7月14日	源義家が誕生。母は上野介平直方の嫡女。*13	②家譜P8
1048	永承3年9月1日 (日不詳)	源頼信が死去。河内国通法寺に葬る。*14	②家譜P8
		源義家が元服。石清水八幡宮にて。	

1051	永承6年	源頼義、陸奥国の押領使安部頼良を追討のため、陸奥守に任じられ、鎮守におもむく。安部頼時は、源頼義にしたがう。 ^{*15}	
	6月25日	源頼義、相模国鎌倉郡由比郷に石清水八幡宮を勧請。幡を亀谷の山上に納める。	②家譜P11
	7月	源頼義、奥州に至り、安部頼良降参を乞いて、名を頼時と改む。	②家譜P11
1054	天喜2年8月	安部頼時の子、厨川(くりやがわ)治郎貞任が叛逆を企て衣河の柵にたて籠る。源頼義を襲う。	②家譜P11
	9月	源頼義、大軍を率いて貞任を攻うつ。然るに頼義の国任終わり、再任の宣旨を蒙りて奥州にあり。	
1062	康平5年11月29日	源頼義、義家が安部貞任一族を滅ぼす。	②家譜P11
1063	康平6年2月	源頼義、帰路の途中相州で八幡宮の社を由比郷に建てる。	②家譜P11
	8月25日	源頼義、伊予守に任ぜられ、正四位下に叙せられる。	②家譜P11
	(日不詳)	源義家、出羽守に任ぜられ、従五位下に叙せられる。	②家譜P11

*6、『山名家譜』P4では天慶3年6月に藤原純友の追討軍が編成され、源経基が副將軍として筑紫へ下され、不日に純友を謀伐して同8月に帰京、正四位に叙し、大宰大弐に任ぜらる。と記されている。

多田院と名く。と記されている。

*7、『尊卑分脈』では天徳5年11月4日卒45歳となっている。『山名家譜』P5では天徳2年(958)11月24日となっている。

*10、改元は3月25日だから、3月15日はまだ安和。
*11、『山名家譜』では天禄元年となっているが、改元は3月25日。

*12、8月27日卒とあり。「系図纂要」

*13、1039(長暦3)生まれ。『国史大辞典』

*14、『国史大辞典』に永承3年81歳没となっている。

*15、1053年鎮守府將軍に。『国史大辞典』

*8、『山名家譜』P8では天延2年(974)9月5日誕生となっている。

*9、『山名家譜』P7に元禄元年(970)3月源満仲が摂津守になる。また同年3月15日、多田庄に住し、翌年2年多田庄に一寺を楯、鷹尾山法華三昧院(現在の

1065	治暦元年9月1日	源頼義が出家し、法名を信海と号す。世の人、入道將軍と称す。 ^{*16}	②家譜P12
1079	承暦3年8月8日	源義家が勅を蒙り美濃國、八島佐渡守源重宗、多田伊豆守源國房と青野が原で合戦。重宗國房を滅ぼす。	②家譜P13
1081	永保元年6月	源義家が陸奥守に任ぜられ、鎮守府將軍に補せられて、奥州に下向する。途中、鎌倉で八幡宮を修復。	②家譜P13?
	8月	源義家が奥州に居住。	②家譜P14
1082	永保2年11月3日	清原武衡、家衡、清衡兄弟が確執し、義家が是を和睦させるが、家衡は従わず、出羽國沼の柵に捕籠る。	②家譜P14
1083	永保3年7月	源頼義が死去。 ^{*17}	②家譜P12
1086	応徳3年春	源義國誕生。 ^{*18}	②家譜P15
1091	寛治5年11月	源義家、國任終わるが、再任の宣旨を受けて奥州に在留。	②家譜P15
1092	寛治6年正月	源義家、武衡と合戦。	②家譜P15
1095	嘉保2年秋	源義國が元服。陸奥四郎と号す。	②家譜P17
1099	庚和元年	源義家、月華門に候して鳴絃の法を行わる。則ち内昇殿を聴され正四位上に叙せられる。	②家譜P17
1103	庚和5年8月	源義國、院の北面に候して従六位に叙せられ、兵庫允に任ぜられる。	②家譜P17
1105	長治2年7月4日	源義國が帯刀長に補せられる。	②家譜P17
1124	天治元年9月	源義家死去。河内國通法寺に葬られる。 ^{*19}	②家譜P14
1135	保延元年	源義國、加賀介に任ぜられ、従五位下に叙せられる。	②家譜P17
1150	久安6年8月	新田義重誕生。母は上野介敦基女。	②家譜P17
1154	久寿元年	源義國、勅勘をこうむり、下野國足利荘に。	②家譜P18、 ^{*20}
1155	久寿2年6月26日	源義國、弘門に入り、荒加賀入道と称す。	②家譜P18、 ^{*21}
1157	保元2年3月8日	源(足利)義國卒去。	②家譜P18、 ^{*21}
		新田義重(義國の嫡男)、上野國新田郡を開発し、左衛門督藤原忠雅に寄進し、新田荘を立荘、同荘の下司となる。 ^{*22}	『山名氏の系譜と事 暦』③守護辞典下巻

新田義重の長男太郎三郎義範、上野国多胡郡山名郷を伝領す	③守護辞典下巻
る。新田山名氏。*23	
新田義重の三男太郎義兼、新田一族の家督と新田荘内の大部分を受領。	
新田義重の二男太郎義俊、多胡郡里見郷を受領、新田里見氏。	

*16、承保2年(1075)剃髪して伊予入道と称する。『国史大辞典』

*17、『尊卑分脈』では永保2年10月12日卒88歳。『国史大辞典』に承保2(1075)10月12日没88歳とある。

*18、『国史大辞典』では生年？

*19、1106嘉承元年68歳。(尊)『国史大辞典』

*20、『山名家譜』参陣の路次において、右大将実能公に参り逢て義国あやまりて下馬におよばず、実能公其狼藉をとがめる随身の侍等はせよりにて義国を馬より控落すによりて義国の良等家人大に此事を憤りて実能公の本所に馳向て火を放ちて焼払う。これによりて義国勅勘をこうむりて下野国に下向ありて、足利の庄に蟄居あり。『尊卑分脈』の義国の項でも、或記に云わくとして、同じ内容の一文を載せている。
義国が下野国足利に移り住んだのは、妻(佐野基綱の

女)の実家の一族藤女姓足利の所領があつたからである。『室町幕府守護職家辞典』下巻P386

*21、『山名家譜』P18義国に四男有り。長男 大炊助義重 次男 陸奥守義康(足利氏諸流の太祖) 三男 左衛門尉国康 四男 藏人判官季邦。

*22、『山名家譜』P19では『保元1年7月13日に新院御叛ありて当今と御合戦におよぶとき義重兄弟とともに当今の御味方となりて、同12日大いに戦功あり、同13日に除目おこなわれて義重を新田荘の下司職に補せられる。』とある。『山名家譜』P19

*23、義重に7男1女あり。長男 義範(山名) 次男 義俊(里見) 3男 義兼(新田) 4男 徳川義季 5男 額田五郎義経 6男 新田冠者義光 7男 新田小四郎義佐 1女 一 源太の妻(師太郎に嫁す)。新田義重の子の長幼の序は定かではなく、里見義俊を長男、山名義範を三男とする系図もある。(事典下)

1180	治承4年4月9日 (月日不詳)	以仁王、平氏追討の令旨を下す。 以仁王の綸旨。義重の許に到来し自ら平家を亡して功を立てんと計立て寺尾の城に楯籠る。	『吾妻鏡』卷1 ②家譜P20*24
1181	9月30日	頼朝、新田義重に書を遣はすといえども返報するあたわず。	『吾妻鏡』卷1
1182	12月12日	新田義重、上野国寺尾城に引き籠り、軍勢を集める。 頼朝、新造亭に移徙す。山名冠者義範等供奉す。	『吾妻鏡』卷1、②『家譜』P21
1182	12月22日	新田義重、頼朝の召に依りて参上す。 里見義成、京都より頼朝の陣に参上す。	『吾妻鏡』卷1 『吾妻鏡』卷1 ②家譜P22
1182	養和元年7月14日	(一説に)新田義重、頼朝の気色をこうむる。 新田義重の息女の件(一度、他家へ嫁いでいた件)で、義重と頼朝が不和となる。	②家譜P21
1182	養和2年4月5日	頼朝、腰越辺江島に出でしめ給ふ。足利冠者、北條殿、新田冠者ら御共に候。	『吾妻鏡』卷2
1184	7月14日	新田冠者義重、息女の件で頼朝の勘気をこうむる。	『吾妻鏡』卷2 『吾妻鏡』卷3
1184	寿永3年1月21日	木曾義仲敗死	『吾妻鏡』卷3、②『家譜』P26
1185	2月5日	山名義範、一谷合戦に義経勢として参加し、摂津国に到る。	『吾妻鏡』卷3、②『家譜』P26
1185	2月7日	一ノ谷の合戦。	②家譜P26
1185	文治元年3月24日	壇ノ浦の合戦。山名義範所々の戦場において軍功あり。	②家譜P26
1185	8月16日	渡辺神崎において勢揃いありて讃岐国八島に押寄て合戦。 小除目において、山名義範、伊豆守に任せられる。源義経(伊予守)、大内惟義(相模守)、足利義兼(上総守)、加賀美遠光(信濃守)、安田義資(越後守)に任せられる。	③守護辞典下巻
1186	10月24日	勝長寿院供養。新田義兼、山名義範・重国ら頼朝の供奉人。	『吾妻鏡』卷5、②『家譜』P27
1186	文治2年3月	新田義重、上野、越後両国の守護となる。	②家譜P22
1188	文治4年1月20日	頼朝、伊豆箱根三島社等参詣。新田義兼、里見義成、世良田義季ら供奉人。	『吾妻鏡』卷8
1188	3月15日	頼朝、鶴岡宮大般若經供養に臨席。里見義成、伊豆守(山名義範)、新田藏人(新田義兼)ら供奉人。	『吾妻鏡』卷8

	7月10日	頼家、着甲始。武州（義信）御馬を頼朝に献ず。里見義成こ れを引く。	『吾妻鏡』卷8
1189	文治5年4月18日	北条時連・元服。新田義兼等出席。	『吾妻鏡』卷9
	6月6日	鶴岡宮塔供養に御白河院は馬等を賜ふ。使者、錦・扇を新田 義兼、里見義成らに授く。	『吾妻鏡』卷9
	6月9日	鶴岡宮塔供養に頼朝臨席。供奉人に世良田義季（徳河三郎義 秀）、新田義兼、里見義成等。	『吾妻鏡』卷9
	7月19日	頼朝、奥州藤原氏討伐に進発。御共の軍勢に山名義範、新田 義兼等。	『吾妻鏡』卷9、②『家 譜』P27
1190	文治6年1月3日	頼朝御行始、比企能員宅に入御。御共に新田義兼等。	『吾妻鏡』卷9
	建久元年11月7日	頼朝入洛。供奉人に山名重国、新田義兼、世良田義季、山名 義範、里見義成等。	『吾妻鏡』卷10
	11月11日	頼朝、石清水に参詣。供奉人に山名義範等。	『吾妻鏡』卷10、②『家 譜』P27
1191	建久2年1月11日	頼朝、鶴岡若宮に参詣。供奉人に山名義範等。	『吾妻鏡』卷11
	2月4日	頼朝、二所参詣。供奉人に新田義兼、山名義範・重国等	『吾妻鏡』卷11
	3月3日	鶴岡宮臨時祭。頼朝参詣。供奉人に山名義範等。	『吾妻鏡』卷11
	4月4日	頼朝、二所参詣の時、山名義範供奉たり。	②『家譜』P28
	4月30日	山名義範、山門所司とともに山門衆徒の訴状を頼朝に伝える。	『吾妻鏡』卷11
	7月28日	寝殿対屋など完成、移徙。供奉人に山名義範、里見義成等	『吾妻鏡』卷11
1192	建久3年7月27日	頼朝、勅使を招く。その座に山名義範も同席。	『吾妻鏡』卷12
	8月	頼朝、征夷大將軍に任じられ鎌倉幕府を開く。	『吾妻鏡』卷12

*24、山名家譜では治承3年に頼朝に平氏追討の院宣が下
り、それより以前新田義重に高倉の官の綸旨が下ると
なっている。その他に治承3年に起こった事として、
9月：頼朝が書を以て義重を催促せらるといへども義

重返書に及ばず。12月22日：義重、鎌倉に赴き頼
朝に謁見、があげられるが、これらの2つの記事は吾
妻鏡の治承4年の記事と一致しており、山名家譜の治
承3年の記述は治承4年の誤りと考えられる。

1192	建久3年10月19日	北条政子、新誕若宮（実朝）とともに幕府に入る。供奉人に里見義成、新田義兼等。	『吾妻鏡』卷12
	11月25日	頼朝、永福寺供養に参ず。供奉人に山名義範、新田義兼等。	『吾妻鏡』卷12、②『家譜』P28
	12月5日	頼朝、浜の御所に諸将を集め新誕の若宮（実朝）を守護するよう命ず。その中に山名義範。	『吾妻鏡』卷12、②『家譜』P28
1193	建久4年3月21日	頼朝、下野国那須野、信濃国三原等の狩倉へ進發。弓馬に達せしめまた、隔心無きの者22人を撰ばる。その中に里見義成。	『吾妻鏡』卷13
	4月28日	頼朝、義重の新田館に遊覧する。	『吾妻鏡』卷13
	5月8日	頼朝、富士野狩を覽るため、駿河に向う。御共に、山名義範、里見義成等。	『吾妻鏡』卷13
	5月15日	斎日によつて狩なし。終日酒宴。頼朝、里見義成を遊君別当に任ず。	『吾妻鏡』卷13
	5月29日	頼朝、曾我五郎を召して夜討宿意を尋ねる。その場に、山名義範、里見義成も臨む。	『吾妻鏡』卷13
1194	9月11日	將軍家の飯の席に里見義成は劍をもつ。	『吾妻鏡』卷13
	建久5年1月1日	（この頃より『吾妻鏡』は鎌倉幕府の史料としての傾向を強め、編集方法が変化している。）	『吾妻鏡』卷13
	2月2日	北条泰時、幕府にて元服の儀あり。山名義範、里見義成も同席。	『吾妻鏡』卷14
	4月4日	鶴岡臨時祭り。里見義成、奉幣使をつとむ。	『吾妻鏡』卷14
	8月8日	頼朝、相模日向山に参詣。供奉人に里見義成、山名義範等	『吾妻鏡』卷14
	閏8月1日	頼朝、三浦に赴く。小笠原あり。里見義成等つとむ。	『吾妻鏡』卷14
	閏8月8日	北条政子、志水冠者追福供養。新田義兼も参加。	『吾妻鏡』卷14
	11月13日	足利義兼、鶴岡にて両界曼陀羅供養。山名義範等参加。	『吾妻鏡』卷14
1195	建久6年3月10日	頼朝、東大寺落慶供養に赴く。供奉人に新田義兼、山名義範・同重国、里見小太（義基か）、世良田義季等。	『吾妻鏡』卷15*25
	3月12日	東大寺供養。供奉人に、山名義範、里見義成等。	『吾妻鏡』卷15
	4月15日	頼朝、石清水に参詣。供奉人に里見義成等。	『吾妻鏡』卷15
	5月20日	頼朝、天王寺参詣。随兵に新田義兼、山名義範、里見義成等。	『吾妻鏡』卷15*26

1300	正安2年3月3日	信濃国御家人市河盛房の所領同中野西条の田地について幕府が御書を発した時、山名盛康（この人物は不明）、その使者となる。	③守護辞典下巻P 388
1285	弘安8年11月17日	城入道一族叛逆。合戦。山名義長（重村の長男）御所方にて戦功あり。	②家譜P 34
1281	弘安4年7月	弘安の役	
1274	文永11年11月	文永の役	
1250	建長2年3月	閑院殿修造、將軍頼嗣公より諸国の地頭、御家人に造営を仰付らる。山名重村、築地18本の内1本を修造。	②家譜P 33
	6月13日	宇治、勢多両所において合戦。山名重村は北条武蔵守泰時の陣にありて、勢多において、敵2人を討ちて、其首を得らる。	②家譜P 33
1221	承久3年5月15日	後鳥羽上皇、北条義時追討の院宣を発する。	②家譜P 29 「承久記」(①大日1、7)
1219	承久元年2月	山名義範卒去。	②家譜P 29
1213	建保元年	和田左衛門尉、平義盛父子一族等叛逆を企るの時に、山名重村御所方において、鎌倉中に於いて戦功を顕わさる。	②家譜P 32
1202	建久2年正月14日	新田義重が死去（68歳）。	『国史大辞典』『尊卑分脈』
1199	建久10年1月13日	源頼朝が死去。	『明日記』
1198	建久9年	重村（重国の3男）誕生。小名を小次郎。	②家譜P 32
	10月7日	鶴岡臨時祭に頼朝参詣。供奉人に、山名義範等。	『吾妻鏡』卷15
	8月16日	頼朝、鶴岡参詣。里見義成等流鏑馬をつとむ。	『吾妻鏡』卷15
	8月15日	鶴岡放生会。頼朝、参宮。供奉人に山名義範等。	『吾妻鏡』卷15
	6月3日	將軍若宮（頼家）参内。供奉人に山名義範等。	『吾妻鏡』卷15

* 25、『山名家譜』では3月9日となっている。

* 26、『山名家譜』では4月20日となっている。

1301	正安3年8月25日	山名新治郎行直、同中務丞俊行、同三郎五郎為俊等、將軍家の仰に背き叛逆を起すによりて誅戮せらる。是によりて其一跡を以て山名義俊に宛行わぬ。(この項は『山名家譜』にはあつて『吾妻鏡』には記載がない。)	②家譜P35
1302	(月日不詳) 乾元元年9月	山名政氏(義俊の長男)、上杉三郎藤原重房の女を娶る。	②家譜P36
1303	嘉元元年月日不詳	北條相模守貞時、最勝園寺供養するによりて將軍久明親王出御あり。此時山名義俊帶刀の列にありて供奉たり。	②家譜P35
1324	正中元年 嘉暦2年 元弘元年3月	山名時氏(政氏の嫡男)誕生。少名を小太郎と言う。母は上杉重房の女なり。	②家譜P39
1326	正中元年	正中の変(後醍醐天皇の討幕計画発覚)	②家譜P36
1331	嘉暦2年 元弘元年3月	山名政氏、剃髪。法名を道高。 後醍醐天皇、北條相模守高時を征伐の企て。山名時氏は鎌倉にありて、將軍守邦親王を守護する。	②家譜P40
1333	正慶2年3月27日	幕府は光厳天皇を擁立。 (室町時代初期の基本文獻である『太平記』には説き物としての面白さもある。)	
1334	9月	北條高時が下知として、足利治郎大輔高氏、名越尾張守高家を大将として京都に赴かしむ。	
1335	4月16日 4月17日 5月 建武2年7月 8月2日	山名時氏(當時34歳)、高氏とともに京都に赴く(しかし、足利に敵対する山名一族もいた)。山名氏の拠点が関東から西国に移るきっかけ。 山名時氏、京都に着陣。 海老名六郎季行を密に伯耆国船の上に遣はし、北條一族を追討の綸旨を乞受けらる。 鎌倉幕府滅亡、建武中興政治はじまる。 北條相模治郎時行(高時2男)、其叔父北條刑部少輔時興と共に旗をあぐ。天皇足利尊氏に勅ありて、是を征伐。 足利尊氏、京都を進發して三河国で北條時行と戦う。 時行敗れて引退く(中先代の乱)。尊氏鎌倉に入り、山名時氏も尊氏に属して戦功あり。 これ以後、約35年間時氏公の活躍の時代である。 鎌倉に入る日、山名時氏小荷駄を繼たり。 竹下において山名時氏大いに戦功あり。	②家譜P40 ②家譜P42
1336	11月11日 12月	足利尊氏、同舍弟左馬頭直義と新田左兵衛督義貞と相模国箱	②家譜P43 ②家譜P37

1336	延元元年正月	根竹の下で合戦。山名政氏、義貞の弟脇屋治部大輔義助を打ち破り、軍功をあらわす。政氏、旗幕を新田家と頒たん為に中黒と引両を合て三引両を家紋とする。『太平記』に記載なし。	②家譜 P 37
		足利尊氏、大軍を率いて京都へ向う(西上軍)。新田左兵衛義貞と大渡にして合戦。細川律師禅定、赤松筑前守範資、山名時氏等、脇屋右衛門義助の軍を破り、山崎に攻入る。新田義貞都を引退き、天皇を供奉し比叡山に登る。『太平記』に記載なし。	②家譜 P 43
	1月11日	山名時氏ら諸將、足利尊氏を守護して入洛。	②家譜 P 43
	1月16日	足利尊氏と新田義貞、洛中にて戦う。	②家譜 P 43
		尊氏破れ、丹波路を差して退き、山名時氏と梅津の里で逢う。尊氏自害せんと言うを、時氏これをとどめる。細川禅定、義貞の軍を破り、この由を聞いて尊氏京都へ帰る。	②家譜 P 44、45
	1月27日	新田義貞、北畠顕家、楠木正成、名和長年等、数万の軍勢で京都を攻む。尊氏京都を落ちて、29日に丹波国篠村に至り、内藤入道道勝の館に入る。	②家譜 P 45
		山名時氏は3500余騎の将として28日に仁和寺嵯峨野の辺に向わる、のゆえに京中の合戦にあわず、尊氏の敗軍を聞き、跡を慕い追いつかる。	②家譜 P 45
	2月2日	尊氏、内藤が館を發し、摂州に赴く。直義、山名時氏と相議して薬師丸を京都に遣わして、持明院殿の院宣を乞わしめる。	②家譜 P 45
	2月6日	尊氏、芥川に至り、新田義貞、北畠顕家、楠木正成の3万騎が追い討つ。高師直を左將軍、山名時氏を右將軍として、豊嶋河原に於て戦う。尊氏敗軍、九州をさして落ち行かる。	②家譜 P 46
	2月8日	尊氏、兵庫を發し、宗像が館に入り、太宰少貳貞経入道妙恵に味方に参るべき由を仰せらる。妙恵嫡子筑後守頼尚に軍勢を差添て宗像が館に来らしむ。	②家譜 P 46

1340	延元元年 3月2日	尊氏、宗像が館を發し、菊池と戦う。直義を大将とし、山名時氏等500騎にて、筑前国多々良兵で菊池を破る。	②家譜P 47
	4月3日	尊氏、山名時氏并に皇山国清に八代城を攻め落さしむ。	②家譜P 48
	4月26日	尊氏、上洛の評議あり。	②家譜P 48
	4月28日	尊氏、太宰府を進發。山名時氏、同師氏（師義のはじめの名）等したがう。	②家譜P 49
	5月1日	尊氏の兵船7300余艘、纜を解て中国地方に押し渡る。	②家譜P 49
	5月5日	尊氏、芸州嚴嶋に参籠あり。	②家譜P 49
	5月25日	尊氏、備後国鞆の浦を出船。	②家譜P 49
(日不詳)		尊氏、摂州兵庫に着陣。	②家譜P 49
		足利直義、楠木正成と戦い敗れる。尊氏、山名等に直義を救わせらる。仁木頼章、山名時氏、衆を励まし、楠木正成を破る。正成自害す。	②家譜P 50
		新田義貞、湊川に來り、尊氏兄弟と戦う。義貞敗軍し、京都に帰り天皇を供奉し比叡山に登る。	②家譜P 50
		尊氏兄弟上洛。東寺に陣し、持明院殿の御幸をなし、拝趨の礼をおこなわる。	②家譜P 50
延元元年 6月2日		山名時氏、尊氏の下知として比叡山に赴き、西坂に陣す。	②家譜P 50
6月20日		新田義貞、山門の寄手を討破り、山名時氏京都へ引き退る。	②家譜P 50
延元元年 7月以前		山名時氏、伯耆国の守護職となる。	
建武4年		三宝院文書 第2回採訪一	
延元2年 7月		高師直、塩冶判官出雲国守護佐々木高貞が叛逆ある旨を尊氏に訴う。（塩冶征伐については諸文献に多くの不突合がある。）	②家譜P 50
暦応4年 3月		尊氏、山名時氏、桃井直常等に塩冶を追討せしむ。	
3月24日		塩冶高貞、密かに京都を逃れ、出雲国に赴く。* 27	②家譜P 51、『太平記』
暦応4年		山名時氏の嫡男右衛門佐師義、賀古川にて、塩冶六郎貞泰を討ちとる。	②家譜P 51、『太平記』
		小塩山にて塩冶五郎高泰討ち死にす。	②家譜P 52
		塩冶高貞の妻子、播州蔭山の宿で桃井直常に攻められて亡ぶ。	②家譜P 52

3月末日	*28 塩治高貞、出雲国に下着。山名時氏父子、宍道山にて高貞を討つ。高貞自害す。*29 時氏、国中の仕置を成して京都に帰陣あり。
	②家譜P 52

*27、

『家譜』では、塩治判官の京都出奔は暦応4年3月17日としているが、『太平記』巻21では、暦応4年3月27日の暁となっており、また『同書』の注では、『萩藩閥閥録』『鰐淵寺文書』『出雲大社諸社家所蔵古文書』『鶴岡社務記録』には暦応4年3月24日となっているとしている。ここでは、暦応4年3月24日とした。

『太平記』巻21では、塩治高貞は播磨路より落ち行き、妻子は丹波路より落したとあり、また、山名時氏父子は播磨路をとって追い、桃井直常と太平出雲守は丹波路を追いかけたと記述している。

*28、

『家譜』では、塩治高貞の妻子は桃井直常に攻められて亡ぶとなっているが、『太平記』巻21では、丹波路を負った桃井直常と太平出雲守は、波々伯部の宿でおくれ馳の勢を待ったために逗留し、子息左衛門佐（注に右衛門佐Ⅱ師義の誤りとしている）、小林民部丞等が昼夜の境もなく追いかけて、播磨の陰山で、塩治の妻子に追いついて自害に追いこんだとなっている。しかし、『太平記』巻21の記述は、その後、山陽道を追う山名父子が山崎宝寺で塩治の郎党を討ち取り、山名時氏は、その後湊川で馬の足を休めたが、子息右衛門佐、小林等は、夜もおいかけて、賀久川にて塩治六郎を討ち取りさらに小塩山で塩治の郎党三人を討ち取るが、塩治高貞は落ち延びて、山名父子らの追手は馬も

つかれて追いつけなかったとある。

以上の『太平記』の記述は、以下の点で不可解である。桃井・太平が波々伯部の宿で逗留したという一文のすぐ後に、子息左衛門佐、小林民部丞等が夜昼の境もなく追いかけたとある。子息左衛門佐は注にあるように右衛門佐の誤りであれば、これは山名師義ということになる。子息左衛門佐が山名師義Ⅱ右衛門佐ということになれば、桃井、太平の文のすぐ後に、子息左衛門佐の記述があり、子息という語句が受けられているのは不可解である。『太平記』の注に、参考本に『本文に云う、桃井太平波々伯部に逗留す、而して此に子息右衛門佐と言うは、文義通ぜず』というところがあるが、この見解は正当である。また播磨路を追った山名父子が丹波路を落ちた塩治高貞の妻子を亡ぼし、さらに、播磨路を落ちた塩治高貞をも追い討つと言うことが実際には無理なのではないか。『太平記』巻21塩治判官讒死の事の記述は、丹波路を落ち下った塩治の妻子を追いかけて、自害に至らしめる記述の部分と山陽道を落ちゆく塩治高貞を追う山名父子の記述の部分とが分かれて、それぞれ独立しており、山名父子がどちらにも登場するのは不可解である。

*29、

『家譜』では、塩治高貞は3月29日に出雲国へ下着し、その後、滅ぼされるとなっており、『太平記』巻21では、高貞の出雲下着は3月晦日、4月1日に滅ぼと記されている。

1 3 4 9	貞和5年 8月12日	正平4年 6月	貞和4年 6月17日	1 3 4 8	貞和3年 正月5日	11月26日	9月28日	9月17日	8月9日	貞和3年 8月以前	1 3 4 7	貞和元年 8月29日	興国6年 8月29日	1 3 4 5	康永3年 2月	興国5年 2月	1 3 4 4	興国4年 12月2日	1 3 4 3	興国2年 3月末頃 暦応4年	1 3 4 1
氏直は尊氏の御所へ入り、師直の師泰は大軍を率いて、尊	直の屋形へ。	数万騎の兵、直義、師直の許に馳せ集まる。山名時氏は師	直義と高師直の対立に伴う緊張激化のため、尊氏、師直を 執事からはずす。	山名時氏、若狭国の守護職となる。	四條畷の戦いで楠木正行、正時が戦死。	楠木正行、山名勢を破り、時氏の弟兼義討死す。(時氏公 は戦上手として知られたが、ここでは敗れている。)	山名時氏、細川頼氏を両大将として、6000全騎を住吉、 天王寺へ差下さる。時氏は住吉に、頼氏は天王寺に陣す。	細川頼氏の軍勢3000騎、藤井寺に着き、楠木正行と戦 い、頼氏敗れて、天王寺に遁籠る。	尊氏細川頼氏を大将として楠木正行の追討を命ず。	山名時氏が隠岐国守護職となる。 *34	よりて甲冑の士58騎を率いて警衛たり。 *34	天龍寺供養によりて尊氏参詣。山名時氏、侍所別当たるに	山名時氏、但州見開山城を攻め取る。	山名時氏に三千余騎にて丹波高山寺を攻め、萩野彦六朝忠 を降す。	山名時氏、丹波国の守護職となる。	山名時氏、丹後国の守護職となる。	つて異なる。つまり、幕府の承認の有無。)	山名時氏、出雲国の守護職となる。(守護職は南北朝によ			
『太平記』 卷27	『太平記』 卷27	『太平記』 卷27	『太平記』 卷27、『足利 尊氏年表』 P28	『若狭国守護職次第』	『太平記』 卷26	『太平記』 卷25	『後鑑』 島津文書	『太平記』 卷25	『太平記』 卷25、『朽木 文書』 *36	『北島文書』 *35	『家譜』 P53、『太平記』 卷24	『後鑑』、『妙楽寺文書』	『太平記』 卷24 *33	『祇園執行日記』 *32	『西大寺文書』 *31	『二尊院文書』 *30					

1350					
正平5年 10月13日	9月13日	師直が近国の将兵に命じて、直冬を備後国の鞆に攻めしむ。 直冬は敗れ、肥後国へ赴く。	尊氏は直義を政務からはずし、上杉重能、畠山道宗を越前に追放することで、師直は囲みを解く。	『太平記』 卷 27	
12月22日	10月22日	義詮が鎌倉から上洛。		『太平記』 卷 27	
12月8日	10月8日	直義、細川頼氏の第に移り、剃髪隠遁す。		『太平記』 卷 27	
観応元年 10月13日	10月13日	尊氏、直冬討伐のため九州に向う。		『太平記』 卷 28 * 37	
10月25日	10月25日	直義、大和国に逃れ、光厳上皇の院宣を賜わり、鎮守府将軍に補せられる。		『太平記』 卷 28	
12月9日	12月9日	直義、使者を吉野に遣わし、降参を乞う。		『太平記』 卷 28	

* 30、『室町幕府守護制度の研究』（佐藤進一）では、暦応4年9月7日付時氏の請文では、出雲国淀新庄につき、去後四月八日御奉書を受けて、遵行を実施した旨が記されており、佐々木（塩冶）高貞の死後、いくばくもなく時氏が出雲国守護に補任されたと考えられる。

* 31、佐藤、前掲書によれば、暦応4年10月4日、西大寺領丹波国志楽庄地頭職の遵行を令した將軍家執事施行状案が山名時志に充てられている。

* 32、『祇園執行日記』康永2年12月2日の条に『丹波守護職事、萩野彦六企陰謀野之間、仁木殿上表、仍山名豆州（時氏）被補云々、仍為打手、近日可被下向云々』とある。『武家時代の政治と文化』（水野恭一郎）より引用

* 33、『山名家譜』では貞和元年の出来事としているが、『祇

園執行日記』から、康永2年12月中の出来事と考えられる。

* 34、『家譜』では58騎となっているが『太平記』では500余騎となっている。この記述から時氏は8月29日以前、侍所頭人であったことがわかる。

* 35、佐藤、前掲書所収『北島文書』に貞和3年8月28日古志次郎左衛門充、伊豆守奉書では時氏の守護の職務を遵行する文言がある。

* 36、『朽木文書』に南方凶徒対治事所差一遣陸奥守頼氏也云々 貞和3年8月9日直義御判とある。『家譜』では貞和4年8月となっているが貞和3年とした方がよいと思われる。他の諸資料との相違あり。

* 37、兵庫県史2巻では10月28日となっている。

1351	正平6年正月7日 観応2年	直義7万騎にて、八幡山に陣し、義詮を攻めんとする。 尊氏は山名時氏を先鋒として上洛をはかり西宮を経て瀬川 (箕面市)に駐留。	『太平記』卷29、『兵庫 県史』卷2 P 686
	正月10日	尊氏と直義軍とが接触し、赤松範資が尊氏軍の主力となり 大渡で戦う。	『兵庫県史』卷2 P 686
	正月15日	尊氏は桃井軍と四條河原で戦う。山名時氏が直義軍に投じ た為、戦況は一変し、尊氏、師直、佐々木道誓は敗れて丹 波に逃れる。	『兵庫県史』卷2 P 686
	2月20日	尊氏は使者を男山の直義に送り、講和をはかる。	『兵庫県史』卷2 P 688
	2月26日	師直、師泰兄弟を上杉能憲が武庫川辺で斬殺。	『兵庫県史』卷2 P 688
	3月25日以前	山名時氏が出雲守護職となる。	『二尊院文書』*38
	6月	尊氏が義詮とともに直義討伐の計画に着手する。	
	8月1日	直義が斯波高経、上杉朝定、山名時氏等を従えて北国に逃走。	『兵庫県史』卷2 P 690
	8月5日以前	幕府は佐々木氏を出雲守護職として認めている。	『二尊院文書』*39
	8月13日以前	幕府は山名時氏の丹波守護職をとりあげる。	『武家時代』P 98、『神 護寺文書』*40
	8月18日	尊氏、直義追討の宣旨を受ける。	『太平記』卷30
	10月8日	直義、鎌倉に下る。	『太平記』卷30
	10月	幕府は山名時氏の若狭守護職をとりあげる。	『太平記』卷30
	正平7年正月6日	直義、薩多山の合戦に敗れる。	『武家時代』P 98
1352	観応3年	直義の急死。(毒殺されたとの風聞があつた。)	『太平記』卷30
	2月26日	北畠顕能等、不意に義詮を討ち、これを破る。義詮、近江 四十九院へ逃る。	『太平記』卷30 *41
	閏2月20日		
	閏2月28日	新田義興、義宗、義治の大軍、尊氏の軍勢と武蔵野の小手 差原で対陣す。新田軍が敗れて、敗走す。	『太平記』卷31
	3月9日	義詮、近江の四十九院を發し、京都に向う。	『太平記』卷31 *42
	3月15日	北畠顕能等、石清水八幡宮へ退く。	『大阪府史』卷3 P 744
	3月27日	義詮の軍勢、南朝方と荒坂山にて戦う。 4、5日後山名師氏(師義とも言う)が出雲、因幡、伯耆 の勢を率いて上洛。財園院に陣をとる。	『太平記』卷31

1353	9月27日	山名時氏、師氏（師義）、伯耆を立ちて、但馬、丹後の兵を集めて上洛。	『太平記』卷31
正平8年5月7日 文和2年	8月26日	山名師氏（師義）、八幡の軍功として、若狭国税所今富庄の知行を佐々木道誓に属して申達せんとすが、道誓の無礼を怒り、伯耆をさして下る。	『太平記』卷32
	5月11日	山名師氏（師義）、父時氏（当時53歳）は足利直義と共に南朝方となり、出雲、伯耆、隠岐、因幡、四万国を征服し、南朝の諸軍と相応じて京都に進撃せんとす。	『太平記』卷31
	4月25日	つまり、時氏は血氣盛んな息子たちに引つ張られ幕府と袂を分かった。このことで丹波守・若狭守を取り上げられる事となった。	『太平記』卷32
		文和と改元。	『太平記』卷32
		南方より、四條大納言隆俊を惣大将として3000余騎上洛。	『太平記』卷32

* 38、『二尊院文書』観応2年3月25日付で禅林寺衆来迎院領出雲国淀新莊地頭職に対する土屋佐衛門太郎、多胡孫四郎等の濫妨停止を令した直義の御教書が山名時氏に施行され、同4月3日時氏がこれを遵行している。
『武家時代』P112

* 39、『二尊院文書』観応2年8月5日 足利義詮御判御教書によれば出雲国淀新莊地頭職に対する濫妨停止のことが佐々木高氏に令せられている。『武家時代』P112

* 40、『神護寺文書』観応2年8月13日付 同寺領丹波国吉富本、新岡莊に対する内藤定光の濫妨を停止する旨の足利義詮の御判御教書が仁木頼章に宛てて出されている。

* 41、本文中では2月27日となっているが、同書註に2月20日が正しいとある。

* 42、本文中では3月11日。註では3月9日。

* 43、『太平記』では8月26日であるが、『家譜』では8月28日となっている。

* 44、『家譜』では、但馬、出雲、丹後の兵となっている。

るから、この時既に丹波守護職は山名時氏にかわって再び仁木頼章に付与されていたと考えられる。『武家時代』P112

正月25日

直冬、東寺実相院に陣をとる。楠木正儀は男山に陣をとる。

『太平記』卷32頭注（建武三年以来記）

* 45、太平記の本文では6月11日となっているが、註では『園太暦』の6月12日をとっている。

* 46、山名の兵士が在京に疲れ、都を落ちて行き、また、義詮が東山、東海、北陸道の勢を率いて攻め上り、赤松則祐が中国より上洛してくるといふ風聞があつた。『山名家譜』では7月25日、京を發し、28日に伯耆に帰陣したとある。

* 47、『太平記』の本文では、尊氏が山名を攻んと、義詮を播磨へ下し、これを聞いた山名時氏が、直冬を惣大将として招請し、直冬は、南朝に尊氏、義詮追討の論旨をもとめた。となっている。

しかし、注では、直冬への論旨が文和2年9月、義詮が播磨国へ下つたのが文和3年10月18日となっており、本年表では注の日付をとった。

『山名家譜』では、文和2年冬に、尊氏、義詮が時氏を討んとして兵を集め、時氏がこれを聞いて、直冬を迎えて、南朝へ奏して、尊氏、義詮追討の論旨を賜わった。となっている。これは太平記の本文と一致している。

* 48、時氏は播磨に入り義詮を討ち、その後丹波へでて仁木

頼章の佐野城を打落とす計画であつたが、越中の桃井直常、越前の斯波高経より飛脚が到来して、時氏に急ぎ京都へ攻上つてほしい、同時に北陸からも攻上る由の知らせを受け、時氏は急遽、上洛することになった。

* 49、太平記の本文では正月12日だが、頭注では12月24日を正しいとしている。

* 50、太平記の本文では正月13日だが、頭注では正月16日となっている。（園太暦）

* 51、太平記の文では正月13日だが、頭注では正月22日となっている。（園太暦）

『山名家譜』P63では

正月12日

時氏父子入洛

同 14日

桃井直常も入洛す。

同 16日

足利高経は直冬を供奉して入洛し、

此日時氏淀の辺に陣し、諸將と相議して、北朝の年号を止めて、南朝の正平10年を用いる。

* 52、『家譜』P63、2月4日尊氏は大軍を率いて東坂本に陣せらるゝとある。太平記本文でも2月4日となっている。

1355	正平10年2月4日 文和4年	2月6日	山名師氏(師義)、八幡に控えたる南方の勢と一つに成つて、神内宿に打寄せる。 山名師氏(師義)、赤松則祐の一族・佐々木道誓の若党が守る一陣を破る。 山名時氏、細河頼之・繁氏等が守る二陣を破る。 山名勢、義詮の陣を守る佐々木道誓の頸を取ろうと近づくが、赤松則祐の勢にはばまれ、山崎をさして引く。 山名師氏(師義)、左ノ目から小耳の根へ射付けられ、馬も射られ自害せんとするを、河村弾正が自分の馬に師氏を乗せて行く。河村弾正は切死す。 山名師氏(師義)は淀へ帰り、討死した者どもの名字を書きしるし、因幡の岩常谷の道場へ送り、亡卒の後世菩提を弔う。中でも河村弾正には、敵から首を乞受けて弔う。	3月13日	直冬、国々の大将相共に、東寺、淀、鳥羽の陣を引て、八幡、住吉、天王寺、堺の浦へ落ちる。 尊氏、癒瘡を患い、逝去する。(54歳)	『太平記』卷32 *53
1358	正平13年4月29日 延文3年		山名時氏、嫡子師氏(師義)、次男中務大輔、出雲、伯耆、因幡3箇所の勢3千騎を率いて美作へ発向す。 名木木山二箇条、篠向の城、大見丈ノ城、菩提寺ノ城、小原ノ城大野城、六箇所の城は一矢も射ず降参する。 林野、妙見二ノ城は20日あまりこらえたるが、山名方にひきいれられる。 倉懸、城一つ残り、佐用貞久、有元佐久がわずかに二・三百騎にて楯籠りたり。山名時氏、子息中務少輔三千余騎にて押寄せ城の四方の山々峯々二十三箇所に陣を取る。播磨と美作の堺には竹山・千草・吉野・石堂が峯の四箇所に赤松則祐が百騎づつ勢を籠める。 山名の執事小林重長は二千余騎にて星祭ノ獄へ打上り、城を眼下に見下ろしてひかえる。 赤松世貞・舎弟則祐・其弟氏範・光範・師範・直範・顕範・佐用・上月・眞嶋・杉			『太平記』卷33
1361	正平16年7月12日 康安元年					

1362	11月4日	原の一族、二千余騎、高倉山の麓に陣を取る。山名師義は勝れたる兵八百騎を卒して、遊軍としてひかえる。阿保信禪が山名方に変わり、但馬国へ馳せ越え、長九郎左衛門と一緒に播磨へ打て入らんと企てるので、赤松は法花山に城郭を構え、大山越の道を塞いで、五箇所へ勢を差向けた。赤松は山名と戦うにも勢少なく、中国の大將細川頼之に備前、備中、備後の兵を集めるよう応援を頼んだが、兵共は己が国々の私戦を捨てかねて、大將に従わなかった。 倉懸の城は兵糧がつき、後攻めの頼みもなく、ついに落ちた。山名は山陰道四箇所をあわせ持つこととなった。 『太平記』卷36、②『家譜』P65、68 *55
正平17年6月3日 康安2年		
山名時氏、五千余騎にて伯耆より美作の院庄へ打越えて、国々に勢を分つ。 一方へは、師義（師氏）を大將とし二千余騎、備前、備中、備前・備中の両国へ発行す。一勢は備前仁萬堀に陣をとりて、敵を待つ。其国の守護の勢、松田・河村・福林寺・浦上等、皆無勢なれば、城に楯籠る。 『太平記』卷38 *56		

* 53、『家譜』でもP63、65に2月4日と同様の内容を記述している。

* 54、『山名家譜』では、山名勢は尊氏の勢に勝利するが、兵糧に乏しく、3月13日に、諸將と相議して各本国に帰るとしている。『家譜』P65

* 55、『家譜』P77に五男時義16歳にして初陣なりとある。

* 56、『家譜』P68時氏父子五千四百騎を率いて伯耆国羽衣石を発し・

* 57、『家譜』P68では、師義、義理、備前・備中の両国へ向わせらる。二萬堀に陣せらる。福林寺、桶上の一族等小勢にして降参す。となつてゐる。

[illegible]

8月28日		日吉神社神輿入洛の風聞。朝廷延暦寺の訴訟を裁許せんとするが、武家執事等は拒む。山名時氏、赤松則祐、佐々木氏頼等は裁断有べきの旨意見するが、幕府は遵行を拒む。	『後愚昧記』
8月29日		衆徒神輿を奉じ西坂本に降る。諸將の警固。山名時氏、子息等其勢千余騎、多々須河原に陣す。	『後愚昧記』
(月日不詳)	將軍義満、評定衆を定めらる。山名時氏、仁木義長、今川貞世、佐々木氏頼、赤松義則の五人なり。		②家譜 P 72

* 58、『太平記』巻38注に多治部備中守師景(東寺百合文書、貞治3・8月日付)とある。『家譜』では多治見備中守・猶崎三河守を大将としてとある。

* 59、『太平記』注では備中の飽庭氏か、秋庭備中守(東寺百合文書、1、20、観応3、7月4日付)『家譜』では飽庭肥前守となっている。

* 60、『太平記』巻38注では高越後守師秀か、となっている。『家譜』では、高越後守師季となっている。

* 61、『太平記』巻38では陶山備前守だけが、將軍方として残った。

* 62、『家譜』では、富田判官秀貞、同彈正少弼直貞に八百余騎を差添えて備後国に入らしむとある。

* 63、『家譜』には、宮下野入道との戦いについてはふれていない。

* 64、山名が南朝方から將軍方についた理由として、『山名家譜』では、將軍から働きかけたとなっている。將軍義詮は、山陰、山陽で猛威を振るっている山名を味方に

つければ、南朝方は將軍の軍門に降るだろうと考え、一色詮光(あきみつ)を山名時氏のもとに送り、將軍家に帰伏させようとした。時氏は、『五ヶ国を將軍家より安堵してくれるなら、味方に付きましよう。』という条件を出し、將軍は時氏の要求をみとめた。『太平記』では、山名の方から將軍家に申し出たとなっている。山名時氏、師義父子は、將軍に使いを送り、近年南朝方についていたのは、ただ佐々木通督に対する怒りからで、將軍に反逆しようとしたからでない。そして、もし、將軍がその罪を許し、山名の領地を認めてくれるなら、將軍の味方につこうと述べている。小浜の今富領のこと海の支配権が原因か。二つの史料には、相違があるが、山名の勢力が南北朝の対立の趨勢を左右する程強大に成っていたことが、將軍方に山名の五ヶ国の領国を認めさせたというように理解できる。

* 65、山名中務大輔を氏冬、民部少輔を氏清とする注がされている。

* 66、後鑑では『花營三代記』より引用し、中務少輔を氏冬としている。

1369	正平24年正月22日	六條八幡宮御社参。役人。御幣。山名右馬助。(幸松か)	『花營三代記』
1370	建徳元年正月5日 応安3年	御剣。同修理亮。(義理か) 楠木正儀、幕府に投降。 山名時氏の3男氏冬が死去。	『花營三代記』 『鳥取県史』卷2P226
1371	建徳2年2月28日 応安4年	御評定始。日次事。十日依山名氏冬去五日事御斟酌 將軍義満、細川頼之をして河内、和泉に向わしむ。 山名時氏、父もこれに従い、4月8日京都を發し15日に河内国に着く。 時氏父子、今川泰範は一万五千騎で千劔破城に向い、龍泉寺、観音寺兩所に陣して戦う。始め時氏父子は観音寺中院に陣し、その後退いて龍泉寺山に陣し城に向いて陣取らる。 11月細川頼之諸將と計りて、時氏をして和泉、河内の内に放火し、氏清をして敵の兵糧の道を指塞ぎ、其のついに乘じて攻んと約して、氏清を止めて、同22日に諸勢京都に帰陣あり。 一方内談始行。山名義理。	『花營三代記』 ②家譜P74
1372	建徳2年2月28日 応安4年	山名時氏老年に及ぶにより、領国但馬、因幡、伯耆、美作、丹波、丹後、紀伊、和泉、備後、隠岐、出雲十一カ国を家嫡に譲り与え隠居すべきのよしを乞わる。*67 將軍家許容あり、よりて十一カ国を以つて子息に分ち与えらる。世に時氏公を称して六分の一殿と言う。 山名時氏死去。行年69歳	②家譜P75 *68
1373	建徳2年6月22日	南方渡河事。一方上瀬。放手渡。 細川頼元、山名義理、氏清、楠木正儀。	『花營三代記』
1374	8月6日	南征諸軍上洛。山名義理、氏清等。	『花營三代記』
1375	文中元年正月23日 応安5年	小侍所沙汰始。山名右衛門左入道亭(師義)にて、始行される。山名次郎時義。	『花營三代記』
1376	2月10日	六條八幡宮御社参。供奉人馬打次第 山名宮内少輔(千時小侍所)	『花營三代記』
1377	10月17日	幕府、丹波守護山名氏清をして、福岡某押領する所の石田本莊一色名を吉田社に還付せしむ。	『吉田家日次記』(④氏清年譜)

1373	文中2年12月19日 応安6年12月27日	幕府、山名氏清をして、中澤一族の吉田社領丹波味間二品勅旨地頭職を押領するを禁ぜしむ。 幕府、丹波守護山名氏清をして、其部下の同国安国寺領今西村半済を押領するを止め、之を同寺雄掌に還付せしむ。 山門神興造替沙汰執行される。貢馬内覧 二番。鶴毛五尺三寸。山名師義。	「吉田家日次記」(④氏清年譜) 「安国寺文書」(④氏清年譜)
1374	(月日不明) 文中3年1月24日 応安7年4月28日	伊勢国合戦。山名氏清、仁木義長を破る。 守護山名氏清、東寺領丹波国大山荘に『カヤカリノ夫』五人に十日間の夫役をかける。 佐女牛八幡宮御社参。次近習の人々に山名時義(干時小侍所)	「後鑑」 「東寺百合文書」(④氏清年譜) 「後鑑」
1375	天授元年3月27日 永和元年6月5日	貢馬内覧。二番。黒駿。山名師義。 石清水八幡宮御社参。供奉人に小侍所。山名弾正少弼。	「花宮三代記」 「後鑑」
1376	天授2年3月11日 永和2年7月19日 7月20日 閏7月5日 12月27日	山名、佐々木家臣闘争。死傷数人。 山名右衛門佐入道(師義)他界。 山名時義被官衆地下人と芋洗橋に戦う。山名方6人うたれる。 時義、雪辱のため軍勢を発向せんとするが、義満に制止される。 山名右衛門佐入道後家他界。 貢馬。二番。鶴毛。山名時義。	「花宮三代記」 「後愚昧記」 「花宮三代記」

* 67、『豊岡市史』上巻P228『山名時氏は応安元年(1368)に家督を惣領の師義に譲った』とある。『山名氏の系譜と事歴』(奥富敬之)

『室町幕府守護職家事典』下巻に所収によれば、現存資料で、この前後の時期に山名一族で保持していたと推定し得る諸国守護職は丹後(長男 師義)、丹波(二男 義理)、因幡(三男 氏冬―八男氏重)、丹波(時氏―四男 氏清)、伯耆(五男 時義)の五ヶ国

である。

* 68、『後愚昧記』に、山名左京大夫入道逝去了。子息右衛門佐入道上洛。逢終焉云々、閉眼之後下向丹州、子息・所従等不貽一人下向、葬送水所辺云々、彼入道生年七十三歳云々、無道之勇士、以命終、結句又非短命、大幸之者也。

1377	天授3年 2月28日 永和3年	山名氏清、父時氏の七回忌法要を三条大宮長福寺に修す。	『迎陽記』(④氏清年譜)
1378	天授4年 2月9日 永和4年	侍所山名氏清の兵、近江国仏覚寺に悪党等(強盜等)を搦取る。 山名修理權太夫(義理)計沙汰被始行。 若宮八幡宮御社參。役人。御幣。山名義理。代舍弟駿河守(義治力)。御劍。同陸奥前司(氏清力)。代舍弟修理亮(高義力)*69	『花宮三代記』 『花宮三代記』
1378	7月24日	山名修理權太夫(義理)計沙汰被始行。	『花宮三代記』
1378	3月27日	犬追物馬場始。着座人々。御座。山名修理權太夫(義理)。同前陸奥守(氏清)。同彈正少弼(時義)。同民部少輔(義幸)。	『花宮三代記』
1378	11月7日	細川右京大夫(頼元)、紀州へ発向。山名修理權太夫(義理)、同陸奥守(氏清)等も発向。	『花宮三代記』
1378	11月21日	紀州より、脚力到来。官方去17日夜没落。	『花宮三代記』
1378	12月4日	紀州発向人々帰京。但、近江、摂津、播磨、備前勢紀州に留められる。	『花宮三代記』
1378	12月5日	南方進發軍士内、少々帰洛之輩等、丹州守護彼随一云々。	『後愚昧記』
1378	12月11日	丹州守護代應鼻和入道、三條公忠と面談し、贈物を賜わる。	『後愚昧記』
1378	12月16日	足利義満東寺に陣す。	『後愚昧記』
1378	12月17日	三條公忠、東寺の山名氏清の許へ馬一疋を送る。(應鼻和入道を通じて)	『後愚昧記』
1378	12月19日	應鼻和入道、早朝三條公忠を訪れ、馬を賜わったお礼と、氏清が使節として参る由、神妙に告げる。	『後愚昧記』
1378	12月20日	夜、山名義理、氏清、南朝方征伐の為発向。淀津油所に着く。	『花宮三代記』、『愚管記』
1378	天授5年 1月22日 康暦元年	山名義理、氏清、時義、土丸城の麓要害三個所に攻め寄る。捕二十余人の由。(此中に城大将橋本甥あり。)生	『花宮三代記』
1378	1月23日	土丸城没落の由。	『花宮三代記』
1378	2月6日	侍所沙汰始。干時山名民部少輔(義幸)	『花宮三代記』
1378	2月9日	山名義理、氏清、時義、紀州有田軍藤浪に打入、湯浅城没	『花宮三代記』

1380 天授6年7月17日 康暦2年	2月11日	山名義理等、石垣城を陥いる。	『後鑑』 *72
	7月25日	右大將家御拝賀。先陣山名民部少輔（千時侍所、随兵百余騎）*73	『後鑑』
	8月日不明	山名時義、備後国を賜る。	②家譜P78
	12月3日	山名讃岐守（義幸）、中国援兵（時義）の為進発。	『後鑑』 *74
	12月7日	貢馬引次第。二番山名左京大夫跡。	『花宮三代記』
	7月17日	和泉国守護山名氏清、橋本民部大輔（正督）等を討取る。	『花宮三代記』
	7月20日	山名氏清が合戦で討取った橋本民部大輔等の首十一が京に着く。	『花宮三代記』
	8月23日	紀州、高野政所并隅田一族等没落。	『花宮三代記』 *75
	9月7日	紀州生地城没落。	『花宮三代記』
	12月22日	幕府管領斯波義将、義満の命により、丹波国東寺領、大山荘領家職田畠参拾町の内、五町を押領する中澤を止め、東寺に還付すべく、山名陸奥守（氏清）に命ず。	『室町幕府御教書案』（④） 『氏清年譜』

*69、舍弟駿河守、同陸奥前司、舍弟修理亮がそれぞれ誰をさすか注なし。『系図纂要』によると、○で示したようになる。

*70、『後愚昧記』12月23日伝聞、紀州守護に山名義理を補し、美作国相並知行す。又、山名氏清を和泉守護に補する。南方退治の為なり云々。

*71、和泉国土丸城。

*72、『花宮三代記』では、軍勢を石垣城に差遣し、凶徒を没落。

*73、『山名陸奥守氏清公略年譜』では侍所頭人山名民部少輔、随兵百余騎を召具す（愚管記）としている。

*74、『花宮三代記』には、山名讃岐守（義幸）下向之。為二與州（時義）中国合戦合力一云々。

*75、大阪府史第三卷P754『紀伊の隅田一族が山名義理の軍に滅ぼされ』とある。『山名陸奥守氏清公略年譜』（宮田靖國）では、山名氏清が隅田一族を滅ぼしたとなっている。

1381	弘和元年 1月24日	山名氏清、大軍を以て泉州土丸城を囲む。和田正武病みて、その子正利・正次防戦す。然と雖も城落ち、神宮寺師綱、福塚忠貞等討死。	山名氏清土丸城入城。	『南朝編年記略』(④氏清年譜)
1382	弘和2年閏正月24日 永徳2年	山名氏清、楠木正儀と河内国平尾荘に戦い、之を破る。 *76	山名氏清、河内・和泉・摂津を取り、勢大いに振う。*77	『三刀屋文書』(④氏清年譜) 『大日本史』、④氏清年譜
1383	弘和3年7月25日 永徳3年	幕府、再度山名氏清をして、中澤の東寺領押領を禁ぜしむ。	幕府、再度山名氏清をして、中澤の東寺領押領を禁ぜしむ。	『室町幕府御教書案』(④氏清年譜) 『室町幕府御教書案』(④氏清年譜)
1385	元中2年12月3日 至徳2年	幕府三度御教書を山名陸奥守(氏清)に発し、『不日止地頭中澤五郎左衛門入道以下輩押領、可被沙汰付雑掌、更不可有緩怠儀之状、俟仰執達如件』と厳命。	山名氏清、丹波勢一千五百騎を率いて、播磨国清水寺に楯籠る赤松氏を攻む。後、細川勢と交代。	『赤松旧記』(④氏清年譜)
1386	元中3年9月2日 至徳3年	幕府、山名氏清を山城国守護となす。氏清この日入国合戦。	赤松氏則、播磨国清水で戦死。	『後鑑』
1388	元中5年3月16日 嘉慶2年	楠木正勝、舍弟正元、和田正利、同正秀、河内国平尾荘に兵を挙げ。和泉守護山名氏清、河内守護畠山基国を授けて之と合戦す。	南軍恩地満正、貢志、崎山等討死して敗れ、千劍破城に退く。	『南朝編年記略』(④氏清年譜)
1389	元中6年3月4日 康応元年	義満、安芸国厳島神社参詣に出発。供奉人に山名満幸。	義満、安芸国厳島神社参詣に出発。供奉人に山名満幸。	『後鑑』(厳島詣記)
	3月17日	山名時熙、備後国より参る。父時義は病によりて参らず。	山名時熙、備後国より参る。父時義は病によりて参らず。	『後鑑』(厳島詣記)
	3月26日	義満帰洛。	義満帰洛。	『後鑑』(厳島詣記)

1390	3月27日	徒歩より帰路せし人、山名満幸等。	『後鑑』(厳島詣記)
	5月9日	山名時義、但馬国において卒去(44歳)。	②家譜P 79 * 78
	竹野の圓通寺に葬る。『後鑑』では5月4日となっている。		
	5月頃	山名伊豆守(義熙)、備後国の守護となる。* 79	②家譜P 80
元中7年2月某日	8月某日	義満、山名時熙、氏之に上洛すべき旨を命ず。兄弟共に病の由にて上洛せず。	②家譜P 82 * 80
	康応2年	義満、山名氏清、満幸に時熙兄弟を討つべき旨を命ず。	
	3月14日	山名時熙、但馬国圓通寺に竹野郷内曾木谷を寄進。	②家譜P 81 * 81

* 76、『後鑑』所収『和漢合運』には、楠木一族6人、若党140人、山名氏清のために討たれる。須賀部新左衛門申状には、去閏正月17日京都を罷立、同21日吹田渡に進み、同22日渡辺河を打渡、即日奥州の陣に馳参。同24日御敵楠木陣河内国平尾御合戦。

* 77、大阪府史巻3によれば、山名氏清の守護職期間について、摂津国のうち東成郡を永徳2年3月以前より明徳2年12月迄。住吉郡を永和4年12月より嘉慶2年3月より明徳2年12月。和泉国は永和4年12月より明徳2年12月。河内について記載なし。

* 78、『後鑑』では5月4日となっている。

* 79、時氏の死後、備後国の守護となったのは、時氏の兄師義の子である義熙である。高野山文書之一、宝簡集465号に同年9月6日備後国因島地頭職を東寺雑掌に遵行すべき旨の幕府御教書(案)が山名伊豆守に充てられている。

* 80、『山名家譜』では年号は明徳となっており、改元の時期3月26日より早く、年号をかえている。時期的には後になる3月14日の記事については、康応のままの年号が使われている。さらに、この二つの記事の記述が『山名家譜』では時期の前後が逆になっている。

* 81、家譜の年号は康応となっている。(3月26日明徳に改元)

1390	元中7年 3月17日	氏清、満幸、軍勢を率いて但馬国に発行す。	②家譜 P 82 * 82
1391	康応2年	細川頼之、備後国の守護となる。	『後鑑』* 83
	明徳元年 9月17日 (3月26日改元)	山名氏清、但馬国一宮出石神社に禁制を下す。	『出石神社文書』(④氏清年譜)
	元中8年 8月某日	山名時熙兄弟潜かに京に上り、東山の辺或は清水寺の辺に隠れて罪なき旨を將軍家に訴う。	②家譜 P 83
	明徳2年 10月10日	山名氏清、和泉より淀まで登りし時、満幸京より淀へ馳下り、時熙兄弟の赦免の儀につき話す。	『明徳記』
	10月11日	山名氏清、宇治にて義満を迎え紅葉の遊覧を約していたが、氏清病と称して参らず、義満不興至極して還御。	『明徳記』
	11月8日	山名満幸、出雲国守護を免ぜられ、丹後国へ追下される。	『明徳記』* 84
	11月10日	山名満幸、和泉へ赴き氏清に京都へ攻め登るように説く。	『南方紀伝』(④氏清年譜)
	11月某日	山名氏清、南朝に帰順し、幕府の討伐を請う。南帝之を聴し、春日刑部少輔頭連をして氏清に錦旗を賜う。	『明徳記』
	12月17日	義満、山名時熙兄弟を赦免す。	『明徳記』* 85
	12月19日	山名満幸、兵を起し丹後国の京方の代官を追出す。	『明徳記』
	12月23日	河内国守護代遊佐国長、山名氏清が合戦の用意をし、今にも立つと注進す。	『明徳記』
	12月24日	山名中無大輔(氏家)、都を落ち、八幡へ馳せ下る。	『明徳記』* 86
	12月25日	義満より、山名義理へ反乱を止めるよう諭す。義理従わず(義理は氏清をいさめるでも無し、和歌山からも出ない)。(氏清を魅力的な人物として、描いている。)	『明徳記』* 87、『太平記』
		山名氏清、山城国、和泉国、丹波国、但馬国、摂津国東成郡、住之江郡の兵を率いて八幡に陣す。(明徳の乱)	『南方紀伝』(④氏清年譜)* 88
		義満、諸将を召て軍の評定。 * 89	『明徳記』

* 82、『山名家譜』時熙は領国に楯籠り防ぎ戦うならば(中略)、

罪なくして反逆の名を取るも口惜しき次第なり。只当国を去りて幾度も身において子細なき旨を申開かんと思ふなりとて、同23日に但馬を立て、備後国に赴き

て塾居あり。

『明徳記』山名播磨守(満幸)ハ伯耆国ヲ追討シテ。ヤガテ当国ト隠岐トヲ拝領シ。陸奥守ハ但馬ノ国ヲ賁随テ其国ノ守護職ニ任ズ。(中世の文書には漢字

とカタカナを両方取り入れたものが多い。)

『妙心文書四』明徳元年8月11日 前美濃守(氏清の家臣)より、本庄八郎三郎充て但馬国七美庄領方半濟事の書下状

『後鑑』には同年10月に、氏清、満幸が時熙兄弟を討ち、氏清は但馬守護、満幸は伯耆守護となるという記事あり。

『山名家譜』P83氏清の勢い強大なりしかば押して一家の棟梁のごとく、家人等も氏清を指して六分一殿と称しけり。

*83、『明德記』細川武蔵入道常久ハ四国ヨリ中国ニ押渡リ。備後国ヲ退治。

美吉文書 康応2年3月18日 備後国重永本新庄の地頭摂津宮内大輔に充てた義満袖判御教書に備後国守護の事、所付武蔵入道常久(細川頼之)也。

*84、『明德記』満幸について次のように書かれている。

時熙退治ノ後ハ、四ヶ国ノ守護職ヲ持テ權勢氏族ニ越エタリ。(中略)出雲国ノ横田ノ荘ハ仙洞ノ御領ニテ手ザス者アルマジカリシヲ、近年押領シケル間教通ノ御教書ヲ成下サレ、度々御内書ヲ以テ申渡スベキ由仰下サレケレドモ、曾テ承引セザル(中略)重テ下知シタリトモ只同篇ナルベシ。所詮守護職ヲ御改替ヨリ外ハ他事アルベカラズト御沙汰既定ケリ。満幸の丹後への放逐について『南朝編年記略』では11月3日となっている。『氏清陸奥守氏清公年表』(宮田靖國)

*85、『後鑑』では『明德記』を引用しているが、去17日を11月17日としている。満幸が挙兵の準備をしていたころ、氏清の行動につい

て『明德記』には、紀伊国へ赴き、舎兄義理合戦への同意を説く。義理は氏清に思い止まるよう諫めるが、聞きいれず、義理も同意し、一門悉く同心して攻め上がらんと沙汰しける。と書かれている。

*86、中務大輔を『後鑑』では氏冬とし、『系図纂要』では氏冬の注に明徳2年12月23日攻落とある。しかし、氏冬は応安3年正月5日に死去したことが、『花営三代記』にあり、明徳の乱に参加したのは氏冬の子、氏家であろう。『新修大阪市史』では『氏家が京都を引き払って山城八幡に逃亡したのが山名側の宣戦となった。』と書かれている。第2巻P427

*87、義理のことを匠作と記述している。

*88、『明德記』に、氏清の妻が12月24日の朝氏清と分か
れ『今は八幡まで御出とて』と書かれている。

*89、『山名家譜』には12月25日の軍の評定で決定した将軍方の布陣を記されている。

今川泰範	八百騎	久我暁
細川常久、頼元	二千騎	中御門大宮表
赤松義則	七百騎	西大宮朱雀
畠山基国	八百騎	神祇官の北
大内義弘	五百騎	二条大宮
一色詮範	三百騎	猪熊
佐々木詮高	七百騎	一条大路のかたわら
時熙兄弟	二百騎	勘解由小路
		將軍家の本陣に備う

元中8年12月26日
明德2年

『明德記』

將軍方の布陣決まる。

○今川泰範

赤松頭則、佐々木高満都合八百余騎 東寺

○義満 一色左京大夫亭、中ノ御門堀川の宿所

○其外の諸軍勢 内野

・細川常久、頼元、二千余騎 中ノ御門西大宮右近ノ馬場前

・赤松頭則、一千三百余騎 冷泉の西大宮の雀森

・皇山基国、八百余騎 神祇官の北、大庭の棕の木を南に見て土御門の末

・大内義弘、五百余騎 神祇官の森を背に二条大宮

・一色詮範、三百余騎 春日猪熊

・勘解由小路義重、五百余騎 中ノ御門油小路

・佐々木高詮、七百余騎 一條の大路を前に当て、北野の森を背にして大嘗会畠

・其外の人々、三千余騎、御馬廻 中御門、猪熊、大宮を前に当て一條辺まで陣を取

る。

○山名満幸、丹波国篠村より、山を越えて峯の堂に陣を取る。一千余騎

幕府、山崎神人等をして山名氏清等入京の路次を塞ぎ、か④氏清年譜、『離宮八幡

つ形勢を注進せしむ。 ④氏清年譜、『離宮八幡

山名勢、洛中に向かつて進撃を始める。

・山名氏家、三百余騎八幡を發し、大渡を越え、淀より藤の森をさして進むが、深

田の中へ落ちこみ、淀へ引返し、氏清の勢と合流。

・山名氏清、二千余騎淀の浮橋を渡り久我縄手より西岡を経て下桂へ打出て、七條

の末を渡り、東洞院を三條までかけ通り、大宮を上りに寄すべしとて、谷の堂まで

つめたりける。

・山名満幸、分国勢一千七百余騎峯の堂をおり下り、梅津の上瀬をこして、二條末

へ西ノ口より押し寄せて、河原ノ面東洞院辺に烟り上る時に、内野へ攻め入らんと、

梅津に陣を取り、夜明けを待つ。

・丹後の守護代小輩の次郎左衛門尉、同平次右衛門尉、土屋党を引具して上梅津よ

り仁和寺へ懸通り、並岡を東へ、一條の通を大將軍の鳥居の前へかけ出て、方々の

攻め口で戦いが始まると、一條を東へ懸通して敵の後を襲う計画。

12月晦日

○丹波勢の中で久下、長澤の二人、内野の陣へ加わる。 * 『明德記』

◎山名上総介（高義）、小林上野守（重長）、二條大宮へ押寄せ、大内義弘の勢と戦い討死。^{*92}

◎山名満幸、土屋党と一手になり千二百余騎、雀の森に進み、細川常久、畠山基国の勢二千七百余騎と戦う。^{*93}

・佐々木高詮七百余騎（大嘗会畠に控えていた）が春日西の大宮に打ち出て、満幸の兵、土屋党と戦う。^{*94}

・満幸、退却してきた二百五十騎をまとめ、細川・畠山両陣の真中に懸入るが打ち負ける。

・満幸、桂川を渡り、丹波路をさして落行く。^{*94}

◎山名氏清、一千余騎にて、三條坊門大宮へ押寄る。大内義弘に赤松義則の勢一千三百余騎が合力す。^{*95}

*90、満幸と氏清との間の合戦は27日と定めていたが、河

内国守護代遊佐国長が17ヶ所に城郭を構え、和泉、紀伊国の軍勢が通行するのを妨げたので、八幡の勢がそろわず、合戦を延期せざるを得なかった。

*91、久下・長澤の者共30余名前夜に降参の打合わせをし、

一番先に桂の瀬をわたったところ、上総介（山名高義）の兵共が怪しんで、とりかこんだが、久下・長澤の二人は逸物の馬で駆け抜けて管領の陣へ入り、残りの者共は討ちとられた。

*92、『群書類従』所収『明德記』には上総介が誰であったか記されていないが、近衛家蔵『明德記』では上総介高義となっており、『山名家譜』では上総介義数となっている。

*93、最初の計画では、満幸の勢は西ノ京口より攻め入り、

土屋党は、敵の背後から襲う計画であったが、29日夜、満幸ら五騎が途中道に迷い梅津の陣と合流した頃にはすでに上総守、小林が討死したとの報告を聞き、計画を変更し、土屋党も一手になって攻めることになった。

*94、満幸既に討たれんと見ゆる時、松田将監引き返して支え、腹をかき切っている間に満幸は桂川を馳せ渡った。

*95、氏清は西の七條へ打出たところで上総介、小林の討死の報を受け、二條大路、同じく戸を曝すべしと馬を早めた。

1391	元中8年12月晦日 明德2年	・山名氏家五百余騎にて、猪熊を上へ押し寄せ、赤松勢の真中に切り入り、赤松勢猪熊を北へなだれ引く。^{*96}・山名時熙、御馬廻りなれど、五十三騎にて、二條大路に打出て、氏清の勢の真中へ懸入るが打負ける。^{*97} ・一色詮範三百余騎、勘解由小路義重五百余騎、二條大宮へ向け出陣。 ・山名氏清の子息宮田左馬介、次男七郎、丹波国をさして猪熊を南へ落ち行く。其他の兵共も我先に落ち行く。^{*98}
1392	元中9年正月1日 明德3年	・山名氏清・一色詮範と懸け合う。山名氏家勢、勘解由小路義重、赤松義則勢と揉合う。氏家の勢の中、家喜九郎等三十八人討死。氏家、猪熊を南へ落ち行く。 ・義満、大宮の合戦に出陣。氏清には、山名の小次郎、山名禪正以下十八騎踏み止まり付添う。山名氏清、一色詮範父子に打ちとられる。山名小次郎討死。^{*99} 義満、一色詮範亭より室町御所へ還る。
	正月4日	乱後の論功行賞がおこなわれる。 ^{*100}
	正月4日	山城国(畠山基国) 丹波国(細川頼元) 丹後国(一色満範) 美作国(赤松義則) 和泉国・紀伊国(大内義弘) 但馬国(山名時熙) 伯耆国(山名氏幸) 隠岐国・出雲国(佐々木高詮) 一色詮範には、小国の守護より、大庄の思符にはしかずとて、若狭国在所稻積(今富)ノ庄を勲功の庄とす。
	正月10日	細川頼元御教書を下し、山名追討の事出雲国須波部(諏訪)一族に令す。 ^{*101}
	2月13日	大内義弘、山名義理征伐のため出発。
	2月18日	山名満幸、因幡国青屋の庄にて遁世す。 ^{*103}
		『諸家文書纂』(『後鑑』) 『明德記』(日付の記載なし) 『明德記』 ^{*102} 『後鑑』

*96、氏家は因幡勢を率いて猪熊を上へ攻め入り、二條の大路で氏清の勢と一手になる計画であった。赤松勢は一且引き下がったが、二條猪熊は破られず、又、本陣に馳集まって、終に氏清軍に勝ったと天下に流布した。

*97、時熙、既に討たると見えける時、垣屋弾正、滑良の二人が助けに入り、弾正、滑良は討死。時熙は大内勢の陣に馳入る。

* 98、氏清は一旦丹波へ引き下り、分国の勢を集め、義理を待って、再度都へ攻め入るよう二人の息子を諭した。

* 99、氏清の勢のうち、金野、高山、宇屋、蓮池も落ちてゆき、氏清には、十八騎だけ付添うだけになった。

* 100、因幡国については『明徳記』正月4日に記述はないが、山名中務大輔（氏家）は守護代入澤、河内守が八幡へ馳下ったので、しかたなく氏清方になった事情から、義満は氏家を宥免したと記述している。

『室町幕府守護制度の研究』下では『大乘院日記目録』明徳3年正月、山名分国配分記録に『山名中務大輔因幡』とあり、因幡国守護として氏家が明徳の乱後も守護であつたことを示されている。

山名満幸は、丹波路を落ちゆき、丹後国、伯耆国へと落ち下り、そこで城郭を構え、満幸の代官延安（塩治）ノ駿河守は出雲国へ下つて、富田の城に楯籠った。

氏清の子息、宮田左馬助兄弟は丹波国畑の城に一時籠つていたが、摂津国有馬出湯から尼崎へ出て、小船に乗船し、紀伊国へ義理を頼つたが、義理は対面せず、兄弟は、熊野の方へ下つたという。

山名氏清の妻は和泉国堺にいたが、氏清の死を聞き、土丸をさして出たが途中日根野で自害を計つたが、はたせず、土丸の城はやがて合戦になるからと、紀伊国根来へ入り、傷を癒す。母を訪ねてきた息子にも会わ

ず。正月13日に死去す。

* 101、『明徳記』日付の記載なし。佐々木高詮の代官隠岐五郎左衛門尉が出雲国へ発向し、山名満幸の代官監治の駿河守が楯籠る富田城を包囲した。國中悉く京勢となり

城には監治一族三十余人になっていた。駿河守の父、上卿入道が降参し、駿河守も切腹、一戦も交えず降参したが、この由を伯耆国で聞いた満幸は

因幡国へ下り、氏家と合戦の相談をしようと因幡国青屋ノ城に落ちついた。一方氏家は將軍から宥免され上洛しようとする時、満幸が上洛に矢を射んとしているという由を聞き氏家は満幸と一戦を交えて帰参の面目にしようとして五百騎を率いて出発した。満幸は合戦に及ぶ手立てもなく、2月18日因幡国青屋ノ城で遁世し、筑紫の方へ立ち、行方知れずになった。

* 102、『明徳記』大内義弘は2月13日都をでて、和泉国に下り、兵船五百艘に分国兵を乗せ、義弘自身は和泉国堺

より七百余騎で出発し、府中に陣を取った。山名義理は大野にあつて、舍弟草山の駿河守に美作勢

を差副て、都合五百余騎、浅野山の廻りを切塞ぎ、雨山土丸に楯籠った。

* 103、『明徳記』本文中では正月となっているが、注では2月となっている。

1392	元中9年 2月19日 明德3年	土丸城失陥 *104	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	2月25日	山名義理、紀伊藤代城を去り、由良に奔す。 *105	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	2月26日	南朝、野上親成をして山名義理を救援せしめようとす、大内軍と和佐山に戦う、南軍破れて湯浅城に退き、親成、大内氏に降る。義満、山名氏家を宥す。この日、氏家入京する。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	2月28日	山名義理、由良の興国寺塔頭思遠院にて出家し、伊勢へ赴く。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	3月2日	細川武藏守頼之入道常久卒。 *107	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	閏10月5日	後龜山天皇神器を後小松天皇に譲る。（南北朝合一）	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
		元中九年の号を停めて、明德三年となる。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
1393	12月 明德4年 2月5日	幕府、京都内野に明德の乱の追善の為法華万部経会を修する。 山名満幸・塩冶遠江入道、出雲国三刀屋代に押寄せ合戦。 城主須和部菊松丸、満幸等を追い払う。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	4月11日	義満、河野通能に命じ、伊予国の軍勢を伯耆国に発行させ、山名氏幸に合力せしむ。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	10月19日	泉州堺において犬追物あり。山名時熙（七匹）	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	10月21日	又、和泉堺において犬追物あり。この日、若君始めて鳥を射たまふ山名時熙（九匹）	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
1394	明德5年 4月19日 （応永元年）	義満、但馬国圓通寺に寺領寄附。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	11月24日	山名満幸率兵の報あり、この日赤松義則、之を討つため、美作に進発する。	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
	応永2年 3月10日	侍所別当京極高詮、山名満幸を京都五條坊門高倉の宿に誅する。 *108	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下
1395	3月20日	義満、山名満幸誅爵の賞として、出雲・隠岐両国守護職および関所分を京極高詮にあてがう。 *109	〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下 〔南北朝編年記略〕（⑤南北朝史）下

*104

『山名義理・同高義の拠る土丸、雨山城失陥』となっているが、同書の2月15日では、義理は大野城にいたことが記され、また『明徳記』にも、『義理は大野城(元海南市)に有りて』と記され、その後土丸城に移った記述はない。

土丸城陥落の前、赤松義則が、一千八百余騎で美作國の者は皆赤松の側に移った為、土丸城の勢も心がわりして、土丸城を出ていつてしまった。土丸城の勢は小勢になって、合戦する力もなく、草山駿河守は土を落ちて、藤代へ移っていったと、『明徳記』に書かれている。

*105

『明徳記』では、義理と同船した人々に、中務少輔氏親、同五郎時理草山駿河守、高山上総守、波留美濃守、桑原彈正左衛門尉、風山治部少輔、箕裏藏人兄弟七郎兵衛尉、入澤左京亮、海賊梶原八郎左衛門をはじめとして63人。由良に到着したのは、26日と記されている。

*106

『明徳記』『山名ノ中務大輔(氏家)二月二十六日ニ上洛シテ。今度ノ不義御免有テ。』と記されている。

*107

『明徳記』臨終の刻、舍弟頼元を以て御所に申されけるは、近年山名一族の者共、動もすれば上意をないがしろにし、何にもして常久が命の内に彼等が緩急を御誠め有様に申沙汰すべき所存にて待つるに、『此者共天爵を蒙りて候つるを見はてて、常久死去仕候事』本意至極也。

*108

『後鑑』では『東寺王代記』を引用し、2月10日としている。

*109

明徳3年正月の論功行賞で出雲、隠岐の守護職を佐々木(京極)高詮に与えた。高詮は早速、出雲に出兵し、山名満幸の代官塩治駿河守の守る富田城を攻略させ、また明徳4年2月、山名満幸・塩治遠江守入道父子の軍と戦った同國の武士須和部菊松丸の軍忠状に高詮自ら証判を与えており、また、国内武士に対する地頭職安堵や社寺領安堵を行い、守護の職務活動をおこなっていた。しかし、幕府より高詮を正式に守護と遇する文書は見当たらない。山名満幸を誅伐し、はじめて、正式に補任された。『室町幕府守護制度の研究』下(佐藤進一)

*110

『茲年相國武家の三職七頭を定む。朝廷の五摂家七清華になぞろふ。三食は斯波、細川、畠山。三管領たり(執事、別当)七頭は山名、一色、土岐、赤松、京極、上杉、伊勢なり。其内に山名、一色、赤松、京極は都の奉行とす(侍所別当)四職なり。』
『山名家譜』P94 応永5年11月、義満領四職を定む。細川満元、畠山基國、斯波義時が家を以て管領とし、山名時熙は一色満範・赤松義則・京極詮高が家を以て四職とす。依て世に三管領四職と称す。時熙は義満、義持、義隆三代の門其職を執行わるゝによりて管領四職の古老たり。

1399	応永6年9月21日	山名氏清の子息、宮田時清・宮田氏明、丹波に蟄居せしが、一揆を起こし、畑の城に籠る。 ^{*111}	②家譜P 95
	10月13日	大内義弘、兵を率い、和泉堺浦に到る。 ^{*112}	『堺記』、『応永記』
	10月27日	義満、絶海中津を使者として堺に派遣し、大内義弘の慰撫につとめるが、義弘は従わず。 ^{*113}	『堺記』、『応永記』
		義満、各社寺に戦勝を祈願させる。	『柳原家記録』(①大日7, 4)
	11月5日	山名時熙兄弟、宮田時清を討つため丹波に向う。將軍家より曾我平次左衛門尉祐明を添えらる。	②家譜P 95 ^{*114}
	11月8日	細川頼基、京極高詮、赤松義則、都合八千余騎にて、淀、山崎より、和泉国に発向す。	『堺記』 ^{*115}
		義満、東寺に陣す。御共の人々畠山基国、同満家、斯波義将、同義重、吉良、石塔、洪川、一色、土岐、今川、武田、小笠原、富樫、河野等都合三万余騎。	『堺記』、『応永記』
	11月14日	義満、八幡に陣し、其の日八幡より、管領、前管領を始として都合三万余騎、和泉国に発行す。 ^{*116}	『堺記』、『応永記』
	11月21日	足利満兼、幕府を援くと称して、武州府中へ発向す。 ^{*117}	『鎌倉大日記』
	11月27日	山名時熙、丹波国から帰陣す。 ^{*118}	②家譜P 96
	11月29日	幕府の兵、大内義弘の堺城を攻める。	『堺記』、『応永記』
		山名右衛門佐入道(時熙)、同民部少輔をはじめとして一門五百騎、北の方三の木戸を攻め破らんと戦う。 ^{*119}	『堺記』、『応永記』
	12月7日	丹波国の合戦で、宮下野等が討死。	『東寺光明講過去帳』 ^{*120}
	12月21日	泉州堺合戦。	『堺記』
		山名民部少輔の勢、北の陣で戦い、杉備中守を討取る。 ^{*121}	大内義弘討死。
		山名の入澤、山名の草山、北の陣で杉豊後守と戦い討死し、堺城落城。堺の町は灰塵に帰す。	豊後も討取られる。 ^{*122}
		因幡守護山名氏家、幕府の旨を奉じ、土屋次郎をして同国吉岡保湯河小日置上郷内の地を山城鞍馬寺雑掌に渡付せしむ。 ^{*123}	『華頂要略』(①大日7, 4)
1400	応永7年正月24日	但馬守護山名時熙、同国興布土莊地頭職内の三十石を興布土中務丞に宛行う。	『山崎文書』(①大日7, 4)
	6月1日		

1401	6月19日	幕府、因幡守護山名氏家をして山城鞍馬寺領因幡日置上郷渡残の地の押領人を退け、下地を寺家雑掌に渡付せしむ。	「青蓮院文書」(①大日7.4)
	8月19日	幕府、因幡守護山名氏家をして、東福寺領同国古海郷に棟別錢を催促するを停めしむ。	「前田家所藏文書」(①大日7.4)
	11月28日	但馬守護山名時熙、同国大同寺の寺の寺規を定む。*123	「大同寺文書」(①大日7.4)
1401	応永8年3月2日	山名時熙、備中守護となる。佐々木筑前入道・太田垣式部入道を派遣する。	⑥常熙年譜
	7月16日	幕府、三重政信の請に依り、備中守護山名時熙をして、同国上村地頭職の押領人を退け、下地を政信に渡付せしむ。	「門主伝」十八(華頂要略九)所収「大日本史料7.5」
	8月3日	備後守護山名時熙、山内熙通をして同国地田莊を安堵せしむ。	「山内首藤文書」(①大日7.5)
	11月9日	幕府、但馬守護山名時熙をして田公正恵に宛行いし同国朝倉莊地頭職を召返し、三宝院雑掌に渡付せしむ。	「三宝院文書」(①大日7.5)
	是年	義満、山名氏清一族進福のために北野に経王堂を建つ。	「大報恩寺縁起」(①大日7.5)
1402	応永9年6月1日	石見守護山名氏利、同国周布兼宗をして、同国内の所領をせしむ。	「萩藩閥閥録」(①大日7.5)
	6月11日	石見守護山名氏利、同国益田兼世知行分所々公田の内河成の地の諸役を免除す。	「益田家什書」(①大日7.5)

*111

山名氏清の長男時清と次男満氏は父氏清に従い、明德2年12月大晦日幕府群と二條大宮で戦っているが、父氏清に諭され、時清・満氏の兄弟は、丹波路へ引き退き、畑の城に籠るが、国人、地下等が悉く背き、畑の城を出て、有馬出湯―尼ヶ崎―伯父義理を頼って紀伊国に赴くが面会できず熊野に落ちていった。と『明德記下』に書かれている。その後、時清等は、丹波の畑城に再び戻り、大内義弘に呼応して、反乱をおこすのである。(畑の城は、現在兵庫県多紀郡篠山町)

*112

義満の度々の上洛命令にかかわらず、大内義弘は上洛せず、10月13日大軍を率いて和泉堺に上陸したが、京都へは平井新左衛門を遣わし、自身は堺にとどまり上洛しなかった。
『南方紀傳』には「和泉、紀伊、筑紫、中国の勢、堺の城に充滿ぬ、南方の兵、楠正秀百余騎を従え大内に馳加わる。また、菊池肥前守も大内に心をよせ、堺の浦に至る。土岐宮内少輔、池田周防守秋政、山名満氏(氏清か二男)一味す。」

* 113

大内義弘は、鎌倉公方足利満兼と内通しており、上洛すれば満兼との約束を違えることになる、絶海中津に述べたことが記されている。

* 114

『山名家譜』では、將軍家により一揆鎮圧を時熙強大に命じ、時熙は6500余騎をひきいて京都を發したと記されている。『堺記』では時清の勢は三百余騎となっており、『山名家譜』の6500余騎は異常に多い。また、『堺記』には鎮圧にむかったのは、小番の衆二頭であつて、時熙が鎮圧に向かったことは記されていない。

『山名家譜』ではさらに11月6日に丹波国に着き、久下、長澤、萩野の一族を味方につけて攻め戦い、1月18日には『宮田民部少輔、八田庄に討て出る。時熙、急に攻めて是を打ち破り、右馬頭氏之、宮田七郎入道満氏を討取り、萩野信盛は宮田時清を討ち取る。時熙すなわち太田垣左近丞、志賀八郎を使とし、此旨を京都に注進し、国中の仕置を執行て、同27日に帰陣あり。』と記されている。山名時清らを討ち取つたとなつてゐるが、12月7日山名時清の反乱が起つてゐる事が『東寺光明講過去帳』等に記されてゐる事と矛盾する記述となつてゐる。

* 115

『応永記』では、六千余騎となつてゐる。

* 116

満兼は大内義弘と内通して京都を攻めようとしてゐたが、12月21日に大内義弘が討死にしたので武州に逗留し、翌年3月、鎌倉に還つた。

* 117

応永6年11月5日の注に記す。

* 118

11月29日の合戦は激戦で『敵御方手負死人幾千

と云数を知らず、(中略)互に人馬の息も盡ぬれば各本陣に引退く』とある。

11月29日の合戦と、12月21日の合戦(大内義弘の討死)の間に、大内義弘と呼応する反乱がおこつてゐることが『堺記』『応永記』に記されている。

◎土岐詮直の反乱の反乱

土岐詮直、尾張国に討入、地下の者共を合わせ700余騎にて、美濃の長森に打越て、池田秋政も加わる。土岐美濃守が和泉から馳下つて、詮直の勢をうち破る。

◎山名氏清の嫡子宮田時清の反乱

宮田時清、丹波国宮田に打入り、都へ登り、京中を焼払い、八幡の陣を襲つて、父氏清の本意を遂げようとした。

時清は三百騎で追分まで行つたが、八幡からは小番の衆二頭が發向し、両陣を張つて待ちかまえた。

萩野源左衛門が先陣となり、佐々木の小原の陣に打ちかかったが、源左衛門はじめ40余人討ち取られた。

宮田時清は大館の陣に打ちかかると、宮の上野は大將宮田を討取ろうとして宮田の勢の中に懸け入つて、多数の兵を討ち取つたが、宮の上野も討死してしまつた。

今川の奈古屋も宮田の勢の中にやぶつて入り、10数人を討取つたが、深手を負つた。

近江国住人勝眞田の遠江守は、奈古屋と一所に討死しようとして、馳けつけ、さんざんに戦つて討死。

宮田は人馬の息をつかす為、引き返し、幕府方も本陣に引きあげた。なお、追分での合戦について

『今川記』では、遠州の住人勝間田遠江守、今川の一族奈古屋三郎が討死したが今川泰範の働きで宮田時清は破れて引き退き、追い討ちをかけて、悉く討

取ったと記されている。
この戦いの後、泰範は12月21日の堺の合戦に加わり、堺城が落城したと書かれている。

◎京極五郎左衛門の反乱

京極五郎左衛門、近江国に打越、甲良庄へ打入って、さんざんに焼払い、地下の者を従えて、二百騎で勢多に向かったが、三井寺の衆徒五百人余りが勢多の橋を引いて待ちかまえていると聞き守口に引き返した。京極高戦が和泉の陣より一千余騎にて近江国に駆けつけたので、五郎左衛門は小勢ではかなわず、美濃の土岐詮直と一所になるうとして美濃へ向かうところに重井の土一揆がおこつて、五郎左衛門等は取り籠められ、命だけは助かつて、行方知れず、落ちのびていった。

山名時清が宮田に打入り、都へ向う途中、追分にて合戦し、幕府方兵、宮の上野が討ち取られたことが、『堺記』に記されているが、『東寺光明講過去帳』に宮下野が討死とあるから、山名(宮田)時清幕府軍の合戦が12月7日に起こったことがわかる。

『佐竹文書』

去七日於丹波八田庄、山名宮内退治の時、若党4人討死、剩令被疵、到忠節條、大神妙之至也、弥可抽戦功之状如件。

応永六年十二月十五日

曾我平治右衛門殿

(満) 花押

足利義持

この文書で去7日は『後鑑』では12月7日としているが、合戦が行われたのは丹波八田庄(船井郡畑荘)である。『角川日本地名大辞典』26・京都府上巻)12月7日の同じ日に2ヶ所で合戦がおこなわれたことになるが、『堺記』では、負うわけでの合戦のみ記されていて、八田庄の合戦については何も記されていない。『山名家譜』では、11月18日に、八田庄の合戦については何も記されていない。『山名家譜』では、11月18日に、八田庄で合戦があり、時熙の勢が宮田、満氏、氏明、時清を討ち取ったと記されている。

『山名常熙関係略年表』『山名常熙と禅刹』所収では、応永6年11月7日に、山名常熙(時熙)、丹波八田庄において、山名—宮田—時清と戦う(佐竹文書)とあり、去7日を、11月7日と解釈されている。

* 120

『堺記』では山名民部少輔とされているが「応永記」では山名民部大輔と記されている。ただし、11月29日の戦いでは「応永記」も山名民部少輔と記しているから、山名民部少輔が正しいと思われる。

* 121

『堺記』では山名の入澤、同草山が杉豊後と戦い、討死したことが記されているが、「応永記」では、山名の入道と記されており、草山についての記述はない。

* 122

因幡守護は、『大日本史料』の注では氏冬となつてゐるが氏家が正しい。

* 123

『山名常熙関係略年譜』『山名常熙と禅刹』では、医王山大同寺とある。

1404	1403	1402
応永11年4月24日	応永10年6月17日	応永9年6月24日
4月26日	8月	7月19日
5月19日	8月10日	7月19日
6月12日		
6月26日		
7月2日		
8月3日		
11月9日		
幕府、安芸守護代山名満氏（氏清の子）をして同国地頭家人等の当知行新本所の支証を8月5日限提出すべきことを令せしむ。 但馬守護山名時熙、同国二万莊公文職を同国厳寺に寄進す。	但馬守護山名時熙、安田孫三郎をして但馬国楽前莊地頭職西方内三分の一の地を直務せしめ、在京せしめる。 幕府、伯耆守護山名氏之をして、同国久古御牧地頭職を同国大山寺西明院雜掌に渡付せしめ、六月二十日、氏之、佐々木信濃入道にこれを命ず。 備後守護山名時熙、佐々木筑前入道をして、祇園社領同国小童保領家職を社家代官に渡付せしむ。 伯山名澄幸、同国束積の内津間分を同国大山寺権現燈明料所として、同寺に寄進す。	山名時熙、因幡国津井郷・・・国衙領分を加え・・・を但馬通寺に寄進する。 幕府、備後守護山名時熙をして、高野山金剛峰寺領同国太田莊及び桑原方地頭職、尾道倉敷伊香ノ地を知行して、年貢千石を寺家に納付せしむ。 石見守護山名氏利、吉田上野入道をして同国吉田郷を安堵せしむ。
を褒む。 *124		
「樗庵寺文書」(⑥常熙年譜)	「益田家什書」(①大日7,5)	「高野山文書」(①大日7,5)
「福原家文書」(①大日7,6)	「垣谷文書」(①大日7,5)	「大山寺文書」(①大日7,6)
「樗庵寺文書」(⑥常熙年譜)	「八坂神社記」(①大日7,6)	「集古文書」(①大日7,6)
「小早川文書」(⑥常熙年譜)		
「吉川家文書」(①大日7,6)		
幕府、吉川経見が安芸守護代山名満氏の手に属し、同国高屋にて国人と戦ったことを褒む。 *124		

1405	11月15日	石見守護山名氏利、益田兼世をして、本領を安堵せしむ。	「益田家什書」(①大日7,4)
1406	11月5日	石見守護山名氏利、同国益田越中入道をして、同国長野庄内黒谷地頭職を周防入道彈正の契約に任せ安堵する。	「益田家什書」(①大日7,7)
	10月4日	但馬守護山名時熙、同国興布土荘内の地を興布土徳石に宛行。	「山崎文書」(①大日7,7)
	12月11日	安芸守護代山名満氏、吉川経見をして、同国平田内宮莊福光名を安堵せしむ。	「吉川家文書」(①大日7,7)
	1406 応永13年3月15日	安芸守護代山名満氏、吉川彈正少弼の死去により、其一族をして同経見を総領として之に同心せしめ、又彈正少弼の遺領同国大朝庄及び志地原を経見に宛行。	「吉川家文書」(①大日7,7)
	3月23日	山名時熙、但馬円通寺内大智庵に敷地を安堵する。26日、時熙、円通大智庵に大有和尚塔頭要脚として、但馬国竹野郷地頭領家兩職内田地町四段余、阿古谷山崎村山林等を寄進する。	「円通寺文書」(⑥常熙年譜)
	閏6月5日	山名時熙、安芸の軍事を平賀弘章、毛利光房に問う。	「毛利家文書」(①大日7,8)
	6月6日	是より先、時熙後小松天皇に月菴和尚の追諡を求め、正統大祖禪師号を是日加賜われる。	「月菴行実」(⑥常熙年譜)
	6月26日	幕府、安芸に軍勢を発向することを止め、守護代山名満氏を召還し、国事を山名熙重(時長の子)に仰付らる。	「毛利家文書」(①大日7,8)
	7月20日	幕府、山名熙重を安芸守護代に任ずる。	「毛利家文書」(①大日7,8)
	7月31日	山名熙重、安芸守護代として安芸国に赴く。	「毛利家文書」(①大日7,8)

* 124

高屋での合戦について、「平賀系図」『大日本史料7-4』に、応永10年、山名満氏芸州守護として下向したが、国人は同心して従わず、高屋に軍勢を向けて合戦した。

応永10年12月11日、平賀宗良が討死、要害を攻

め、三年間、終に山名殿は帰洛した。平賀共益、同惟益、同惟元も、討死したことを記している。「平賀系図」では山名満氏を芸州守護としているが、これは守護代の誤りである。

1406	応永13年8月	是月、但馬大同寺茂林興樹、月菴行実・・・月菴録・・・を著す。是れより先、時熙、紙を出して興樹に月菴の法語を需める。	「大同寺月菴録」⑥常熙年譜
	10月4日	但馬守護山名時熙、同国興長寺に園部道場の萬維公事を免除す。17日、山名時熙、興長寺領の段錢を寄進し、同寺に但馬国竹野郷弥吉名内土貢六十貫文下地及び嶋屋敷之替一所を安堵する。	「興長寺文書」①大日7・8
	11月8日	石見守護山名氏利、同国波多野永寿丸氏秀に、同国長野庄内美濃地村地頭職を安堵する。	「益田家什書」①大日7・8
	是年	山名時熙・・・巨川・・・瑞岩竜・・・二四・・・を擁護する。	「前南禅瑞岩禅師行道記」⑥常熙年譜 ⑥常熙年譜
1407	応永14年1月28日	山名時熙、石見周布次郎・・・兼宗・・・に石見守護代入沢八郎左衛門入道の安芸発向を伝え参陣を促す。	「建内文書」①大日7・8
	7月2日	幕府、備後守護山名時熙をして、祇園社領同国小童保に臨時課役を催促するを停めしむ。	「益田家什書」①大日7・9
	12月11日	石見守護山名氏利、益田兼家の所領を安堵する。山名氏利、益田兼家の知行所の段錢、公田八十二町九反半の所役を入澤土佐入道に沙汰せしむ。山名氏利、石見国長野庄内黒谷郷地頭職を波多野氏秀に安堵する。	「教言卿記」(『後鑑』、『大日本史7・10』を見ること)
1408	応永15年3月8日	是日より、28日迄、後小松天皇、義満の北山第に行幸。	
	4月9日	山名時熙、三吉入道、阿須那某へ書状送付したこと、備後辺の荒説跡形無きこと等を、毛利備中守光房に伝える。	「毛利家文書」①大日7・8
	4月10日	山名時熙、義満の伊勢参宮に供奉する。	「毛利家文書」①大日7・8
	4月25日	山名時熙、金子某の心替に付、早々退治したことを賞するが、毛利備中守光房が出陣しなかつたことにつき反省を求め。	「毛利家文書」①大日7・8
	5月3日	山名時熙、去月19日の毛利備中守よりの書状で佐々井井ニ山城及び、熊谷在直が御方へ参つたことを知って喜び、	「毛利家文書」①大日7・8

1410	1409	5月6日	平賀弘章より音信がないこと、武田信守の振舞いについて毛利備中守に尋ねる。	『教言卿記』、『後鑑』、 ⑥常熙年譜
		6月24日	山名時熙、義満の中陰の間、等持院に祇候する。	「毛利家文書」(①大日7・8)
		8月12日	山名時熙、三吉入道が要害に楯籠り、他領を侵す故、急ぎ要害をはずし、所領を給人に返すより、毛利光房に重ねて申付けさせる。	「毛利家文書」(①大日7・8)
		9月28日	山名時熙、毛利光房より弓十張を贈られたことを謝し、時熙、光房に太刀一振、籠手一具を贈る。	「毛利家文書」(①大日7・8)
		12月23日	山名時熙、御所より拝領の馬(鶴毛)一疋を毛利光房に贈る。	「三宝山文書」(⑥常熙年譜)
	是冬		幕府、伯耆守護山名氏之をして、同国国延保下地押領の被官人を退けさせる。	「月菴録」(⑥常熙年譜)
	1409	1409	但馬大同寺茂林興樹寂する。	「月菴録」(⑥常熙年譜)
	1409	1409	山名時熙、「月菴録」の刊行に資金を出す。	「月菴録」(⑥常熙年譜)
	1409	1409	惟肖得殿、これに跋文を寄す。	「月菴録」(⑥常熙年譜)
	1409	1409	但馬国楞嚴寺領因幡国服部庄領家職十年の半済満期となり、南溟昌運、是日太初周廓に寺家一円知行を確認する。	「楞嚴寺文書」(⑥常熙年譜)
	1409	1409	足利義持、山名調べに大和国宇田郡の替として、丹波国宮田荘を宛行う。	「近衛家文書」(①大日7・12)
	1409	1409	足利義持、但馬国楞嚴寺領因幡国服部庄領家職を楞嚴寺に安堵する。	「楞嚴寺文書」(⑥常熙年譜)
	1409	1409	備後守護山名時熙、同国地田比庄内福田十名を山名通に充行う。	「山内首藤文書」(①大日7・13)
	1409	1409	幕府、管領斯波義淳を罷、畠山満家を以て之に補す。	①大日7・13
	1409	1409	石見守護山名氏利、同国長野庄内得屋郷地頭職を益田秀兼に安堵する。山名氏利、石見守護代入澤土佐入道泰明をして、後屋郷の当給人の替地を宛行うを令す。	「益田家什書」(①大日7・13)
	1409	1409	幕府、備後守護山名時熙をして、被官人の同国重永本新両荘地頭職を押防するを停め、下地を摂津能淳代に渡付せしむ。	「美吉文書」(①大日7・13)

									1 4 1 3
8月5日	足利義持、山名駿河入道了順の西山地蔵院領摂津国広田位倍庄を同院に返付し、替地を了順に宛行う。同日山名時熙邸に連歌を興行する。	「地藏院文書」(⑥常熙年譜)							
9月4日	但馬楞巖寺開山南溟昌運寂す。	「楞巖寺文書」(①大日7.17)							
9月11日	幕府、東寺修造料として、出雲国段銭及び尾張、越中、丹後、備前、備後五箇国棟別銭を同時に付す。	「東寺百合文書」(①大日7.17)							
11月2日	是日、幕府、備後守護山名時に棟別一疋の徴収を令する。幕府、安芸守護代山名熙重をして、毛利道心の毛利頼廣所領同国吉田荘内麻原郷地頭職を押領するを停め、下地を頼廣に渡付せしむ。	「毛利家文書」(①大日7.17)							
11月22日	山名常勝教清(義理の孫)、入澤土佐入道に令して、石見周布観心に同国周布郷地の地を安堵し、渡付する。	「萩藩閥閥録」(⑥常熙年譜)							
応永20年1月22日	足利義持、山名時熙邸に渡御	「満濟准后日記」(⑥常熙年譜)							
是月	山名小次郎(時熙の子)、足利義持の御前にて元服。十歳、義持の一字を賜り、持豊と名づく。	②家譜P 99							
1月25日	足利義持、義嗣、青蓮院に詣でる。管領、山名八郎ら供奉する。	「教興卿記」(①大日7.17)							
3月8日	石見守護代入澤康明、幕府の旨を承け、同国益田秀兼をして、同国得屋郷四平方を安堵せしむ。	「益田文書」(①大日7.18)							
6月11日	源持熙(時熙次男)、従五位下となる。	「歴代土佐」(⑥常熙年譜)							
6月27日	源持熙、刑部少輔となる。	「歴代土佐」(⑥常熙年譜)							
8月15日	南禅寺第七八世嬾室漫稿の著者仲芳円伊寂す。六十歳。	⑥常熙年譜、「南禅住持籍」等(①大日7.18)							
8月29日	足利義持、日野義資邸に渡御。管領、山名時熙等参る。	「教興卿記」(①大日7.18)							
9月3日	足利義持、山名時熙邸に渡御。	「満濟准后日記」(⑥常熙年譜)							
10月20日	足利義持、山名時熙邸に渡御。	「満濟准后日記」(⑥常熙年譜)							

1416			
10月23日	幕府、御禊行幸供奉雑隼人料の進済を山名時熙等に命ず。	「壬生文書」(①大日7、23)	
応永23年1月22日	足利義持、山名邸に渡御する。	「満済准后日記」(⑥常熙年譜)	
5月27日	足利義持、北野より醍醐寺に赴き、清瀧宮に参詣。斯波義淳、畠山満家、細川満元、山名時熙、赤松満祐、一色義範、細川満久、富樫満成等供奉。	「満済准后日記」(①大日7、24)	
6月1日	足利義持、兵具を所持する相国寺僧数10人を侍所に置く。	「満済准后日記」(①大日7、24)	
7月3日	大光明寺の客僧、山名奥州謀反事一部語之。	「看聞御記」(⑥常熙年譜)	
9月11日	足利義持、南都へ下向。細川満元、斯波義教、畠山満家、一色義範、山名時熙等供奉。	「看聞日記」(①大日7、25)	
10月2日	前関東管領上杉金吾(氏憲)、足利満隆が兵を挙げ、関東公方足利持氏を。	「看聞日記」(①大日7、25)	
10月7日	足利義持、伏見大光明寺に赴く。細川持元、畠山持国、山名持豊等供奉。	「看聞日記」(①大日7、25)	
10月30日	足利義嗣、山城高尾に出奔し、出家す。	「看聞日記」(①大日7、25)	
11月3日	足利持氏への御加勢として、京都より山名持熙を差下す。	「喜連川判鑑」(①大日7、25)	

山名氏編年史参考・関連文献

1000年代

『大鏡』

1100年代

『陸奥話記』

『今鏡』

『鎌倉大日記』

1025(万寿2年)このころ成立、著者については諸説あり。仮名文・列伝体、藤原氏栄華の時代中心。以後の歴史書に影響。
1051(治承21)別名『陸奥物語』著者不明、前九年の役の戦記。

1170(嘉応2年)成立。没落期の貴族社会を記す。

1180(治承4年)4月(1266(文永3年)7月の間について記す。鎌倉時代史の基本書。漢文調から脱化した独特の武家用語。

1180(治承4年)1589(天正17年)(著者不明)武家政権を中心とした年表、室町期に至る。

1200年代

『愚管抄』

『花園天皇宸記』
1300年代

『花園天皇宸記』

嘉元記
眞曲抄
園太曆

1

庭訓往來
祇園執行
舊記

□

愚管記

1

後愚昧記
花當三代記

守 1 1 1
の 3 3 3

日	6	6	6
記	7	1	0

增鏡

11

1400年代

『難太平記』

「永隆軒日錄」

1

『応仁記』

『細川勝元記』

「實隆公司」

1

『足利季世記』

1220(承久2年)天台座主・慈圓。漢家年代、皇帝年代記と古代以降の社会の動きを評論。歴史の道理で示す。
1200年代後半。花園天皇。両統の争いを詳しく述べる。

130065 (嘉元4年) 月空、兼會寺代に流(行)と宴由と集戌。の間の朝野の雑事について記している。

公家の動向を述べている。
 1311(長元元年) 2月
 1354(延文4年) 12月
 洞院公賢の旧記。南北朝期の

1
 1
 3
 3
 4
 0
 6
 3
 0
 0
 年
 (康)代前
 享元半
 二年期
 手
 こ
 り
 へ
 ち
 立
 七
 二
 玄患の作か。
 小易去(平)鎌倉以後の細川武士階級の諸事。
 明弘治五年。向宗、足利將軍の動靜を記す。
 南無三尊に理。ふまき上りし。

不明。『続々群議類從』所収
1352(文和二年)3月、所
近衛道嗣の日記、南北朝の交渉家の動向など。

[illegible]

府の日記(寛政6年) 別名『室田言』 筆者不明 足利義満・義持・義隆の3代にわたる幕
 (文中3年) 二條良基 編年体の歴史物語。大覚寺統に同情的、仮名文。

1399
1399
1399

(明徳3年)
(應永6年)

夏、翌年冬。山名氏清の乱についての戦記物語。
著者不明。別名『大内義弘退治記』。義満の時代を記す。

1402（応永9年）今川貞世。下克上の風潮を指摘。山名時氏の言葉を引く『太平記』を批判。

1436 (永享8年) 1435 (永享7年) 1434 (永享6年) 1433 (永享5年) 1432 (永享4年) 1431 (永享3年) 1430 (永享2年) 1429 (永享元年) 1428 (長享2年) 1427 (長享元年) 1426 (明応2年) 1425 (明応元年) 1424 (長祿元年) 1423 (長祿2年) 1422 (長祿3年) 1421 (長祿4年) 1420 (長祿5年) 1419 (長祿6年) 1418 (長祿7年) 1417 (長祿8年) 1416 (長祿9年) 1415 (長祿10年) 1414 (長祿11年) 1413 (長祿12年) 1412 (長祿13年) 1411 (長祿14年) 1410 (長祿15年) 1409 (長祿16年) 1408 (長祿17年) 1407 (長祿18年) 1406 (長祿19年) 1405 (長祿20年) 1404 (長祿21年) 1403 (長祿22年) 1402 (長祿23年) 1401 (長祿24年) 1400 (長祿25年) 1399 (長祿26年) 1398 (長祿27年) 1397 (長祿28年) 1396 (長祿29年) 1395 (長祿30年) 1394 (長祿31年) 1393 (長祿32年) 1392 (長祿33年) 1391 (長祿34年) 1390 (長祿35年) 1389 (長祿36年) 1388 (長祿37年) 1387 (長祿38年) 1386 (長祿39年) 1385 (長祿40年) 1384 (長祿41年) 1383 (長祿42年) 1382 (長祿43年) 1381 (長祿44年) 1380 (長祿45年) 1379 (長祿46年) 1378 (長祿47年) 1377 (長祿48年) 1376 (長祿49年) 1375 (長祿50年) 1374 (長祿51年) 1373 (長祿52年) 1372 (長祿53年) 1371 (長祿54年) 1370 (長祿55年) 1369 (長祿56年) 1368 (長祿57年) 1367 (長祿58年) 1366 (長祿59年) 1365 (長祿60年) 1364 (長祿61年) 1363 (長祿62年) 1362 (長祿63年) 1361 (長祿64年) 1360 (長祿65年) 1359 (長祿66年) 1358 (長祿67年) 1357 (長祿68年) 1356 (長祿69年) 1355 (長祿70年) 1354 (長祿71年) 1353 (長祿72年) 1352 (長祿73年) 1351 (長祿74年) 1350 (長祿75年) 1349 (長祿76年) 1348 (長祿77年) 1347 (長祿78年) 1346 (長祿79年) 1345 (長祿80年) 1344 (長祿81年) 1343 (長祿82年) 1342 (長祿83年) 1341 (長祿84年) 1340 (長祿85年) 1339 (長祿86年) 1338 (長祿87年) 1337 (長祿88年) 1336 (長祿89年) 1335 (長祿90年) 1334 (長祿91年) 1333 (長祿92年) 1332 (長祿93年) 1331 (長祿94年) 1330 (長祿95年) 1329 (長祿96年) 1328 (長祿97年) 1327 (長祿98年) 1326 (長祿99年) 1325 (長祿100年) 1324 (長祿101年) 1323 (長祿102年) 1322 (長祿103年) 1321 (長祿104年) 1320 (長祿105年) 1319 (長祿106年) 1318 (長祿107年) 1317 (長祿108年) 1316 (長祿109年) 1315 (長祿110年) 1314 (長祿111年) 1313 (長祿112年) 1312 (長祿113年) 1311 (長祿114年) 1310 (長祿115年) 1309 (長祿116年) 1308 (長祿117年) 1307 (長祿118年) 1306 (長祿119年) 1305 (長祿120年) 1304 (長祿121年) 1303 (長祿122年) 1302 (長祿123年) 1301 (長祿124年) 1300 (長祿125年) 1299 (長祿126年) 1298 (長祿127年) 1297 (長祿128年) 1296 (長祿129年) 1295 (長祿130年) 1294 (長祿131年) 1293 (長祿132年) 1292 (長祿133年) 1291 (長祿134年) 1290 (長祿135年) 1289 (長祿136年) 1288 (長祿137年) 1287 (長祿138年) 1286 (長祿139年) 1285 (長祿140年) 1284 (長祿141年) 1283 (長祿142年) 1282 (長祿143年) 1281 (長祿144年) 1280 (長祿145年) 1279 (長祿146年) 1278 (長祿147年) 1277 (長祿148年) 1276 (長祿149年) 1275 (長祿150年) 1274 (長祿151年) 1273 (長祿152年) 1272 (長祿153年) 1271 (長祿154年) 1270 (長祿155年) 1269 (長祿156年) 1268 (長祿157年) 1267 (長祿158年) 1266 (長祿159年) 1265 (長祿160年) 1264 (長祿161年) 1263 (長祿162年) 1262 (長祿163年) 1261 (長祿164年) 1260 (長祿165年) 1259 (長祿166年) 1258 (長祿167年) 1257 (長祿168年) 1256 (長祿169年) 1255 (長祿170年) 1254 (長祿171年) 1253 (長祿172年) 1252 (長祿173年) 1251 (長祿174年) 1250 (長祿175年) 1249 (長祿176年) 1248 (長祿177年) 1247 (長祿178年) 1246 (長祿179年) 1245 (長祿180年) 1244 (長祿181年) 1243 (長祿182年) 1242 (長祿183年) 1241 (長祿184年) 1240 (長祿185年) 1239 (長祿186年) 1238 (長祿187年) 1237 (長祿188年) 1236 (長祿189年) 1235 (長祿190年) 1234 (長祿191年) 1233 (長祿192年) 1232 (長祿193年) 1231 (長祿194年) 1230 (長祿195年) 1229 (長祿196年) 1228 (長祿197年) 1227 (長祿198年) 1226 (長祿199年) 1225 (長祿200年) 1224 (長祿201年) 1223 (長祿202年) 1222 (長祿203年) 1221 (長祿204年) 1220 (長祿205年) 1219 (長祿206年) 1218 (長祿207年) 1217 (長祿208年) 1216 (長祿209年) 1215 (長祿210年) 1214 (長祿211年) 1213 (長祿212年) 1212 (長祿213年) 1211 (長祿214年) 1210 (長祿215年) 1209 (長祿216年) 1208 (長祿217年) 1207 (長祿218年) 1206 (長祿219年) 1205 (長祿220年) 1204 (長祿221年) 1203 (長祿222年) 1202 (長祿223年) 1201 (長祿224年) 1200 (長祿225年) 1199 (長祿226年) 1198 (長祿227年) 1197 (長祿228年) 1196 (長祿229年) 1195 (長祿230年) 1194 (長祿231年) 1193 (長祿232年) 1192 (長祿233年) 1191 (長祿234年) 1190 (長祿235年) 1189 (長祿236年) 1188 (長祿237年) 1187 (長祿238年) 1186 (長祿239年) 1185 (長祿240年) 1184 (長祿241年) 1183 (長祿242年) 1182 (長祿243年) 1181 (長祿244年) 1180 (長祿245年) 1179 (長祿246年) 1178 (長祿247年) 1177 (長祿248年) 1176 (長祿249年) 1175 (長祿250年) 1174 (長祿251年) 1173 (長祿252年) 1172 (長祿253年) 1171 (長祿254年) 1170 (長祿255年) 1169 (長祿256年) 1168 (長祿257年) 1167 (長祿258年) 1166 (長祿259年) 1165 (長祿260年) 1164 (長祿261年) 1163 (長祿262年) 1162 (長祿263年) 1161 (長祿264年) 1160 (長祿265年) 1159 (長祿266年) 1158 (長祿267年) 1157 (長祿268年) 1156 (長祿269年) 1155 (長祿270年) 1154 (長祿271年) 1153 (長祿272年) 1152 (長祿273年) 1151 (長祿274年) 1150 (長祿275年) 1149 (長祿276年) 1148 (長祿277年) 1147 (長祿278年) 1146 (長祿279年) 1145 (長祿280年) 1144 (長祿281年) 1143 (長祿282年) 1142 (長祿283年) 1141 (長祿284年) 1140 (長祿285年) 1139 (長祿286年) 1138 (長祿287年) 1137 (長祿288年) 1136 (長祿289年) 1135 (長祿290年) 1134 (長祿291年)

で、足利氏から北条早雲まで。1444頃（永安年間）1558頃（永禄年間）著者不明。のち『応仁略記』『応仁別記』あり。

室町時代中期に成立。一休の宗教的情熱や思想のもの。著者不明。

1474(文明6年)正月、1536(天文5年)三篠西實降。元は『愚記』という。室町後記の公家生活・文化事情について。

1487(長享元年)
抗争を記した軍記物。
(永祿12年) 著者
成立年不明
室町幕府末期の政權

『鹿苑日録』

1487 (長享元年) 1651 (慶安4年) 『蔭涼軒日録』の続編。遣明使についての記事あり。

1500年代

『続神皇正統記』
『蛇川親孝日記』
『応仁乱消息』
『大内義隆記』
『永禄記』

1500年頃、小槻晴富。
1516 (永正13年) から1522 (大永2年) までの残闕記。政所の日記
1523 (大永3年) 頃成立。不明両軍の他に公家民衆の動向を記す。
1551 (天文20年) この頃成立。
1555 (永禄8年) 1568 (同11年)、著者不明。將軍義輝の暗殺から義昭が織田信長を頼って幕府を再興しようとするまでの事情。
1570頃、生島宗竹。細川家の二党派(高国と澄元)の抗争中心。
1588 (天正16年) 因幡守入道定阿。赤松氏の起こり、円心時代の全盛、嘉吉の乱、応仁の乱。戦国期の内訌を述べる。
年代著者不明。嘉吉の乱後の赤松氏再興の様子を述べた軍記物。
不明、別名『篠葉集』。山名政豊『続群書類従合戦部』所収。

『二川分流記』
『赤松記』

1597 (慶長2年) 頃。824年から1597年までの天台座主の歴名記。

1600年代

『山名家犬追物記』
『天台座主記』
『寛政重修家譜』
『本朝通鑑』
『鹿苑日録』
『日本王代』
『大日本史』
『陰徳太平記』

1638 (寛永15年) 神戸良政。室町期から織豊政権までの伊勢國神戸氏の動向。漢文。
1641 (寛永18年) 1812 (文化2年) 徳川幕府による大名、旗本の系譜編纂。
1644 (正保元年) 1670 (寛文10年)、林羅山・林鷲峯(春斉)。神代から慶長6年までの漢文の編纂史。173巻。
1651 (慶安3年) 相国寺鹿苑院の僧録司の日記。
1652 (慶安5年) 小浜藩主・酒井忠勝の求めで林鷲峯(春斉)。神代から正親町天皇までの事件の要点をまとめる。
1657 (明暦3年) 1906 (明治39年) 徳川光圀の意図で始まる。水戸藩代々の儒家による。
1665 (寛文5年) 頃完成、吉川家家臣・香川正矩編著。戦国時代における、毛利氏を中心とした中国地方の諸家の興亡を記述。

1700年代

『南朝編年録』
『郡書一覽』
『郡書類従』
『日本外史』
『後鑑』

1713年 (正徳3年) 跡部良頭。南朝73年間の事蹟。

1801 (享和元年)、大坂の書籍商・尾崎雅嘉。
1819 (文政2年) 塙保己一。江戸期以前の国書で、木版可能なもの1270余種を編集。
1827 (文政10年) 漢文の武家時代史。
1843頃 (天保年間) 幕府の儒臣・成島良譲の編。室町幕府の歴史を『吾妻鏡』の体裁

『歴代殘闕日記』

『統日本史』
『史籍集覽』

1900年代

『大日本史料』

『系圖綜覽』
『平賀文書』

にならない、編年体で編纂。『太平記』『梅松論』からの引用多し。
1858(安政5年)、信濃藩主堀直格の命で国学者黒川春村が編集。「宇多天皇御記」から江戸来期までの日記、記録320点。
1873(明治6年)一色重熙。『大日本史』の後続を意図、古代から豊臣氏までの田制も。
1881(明治14年)一色重熙。『大日本史』の後続を意図、古代から豊臣氏までの田制も。
書を集録。

1902(明治35年)刊行始まる、現在も継続中。東京大学史料編纂所。『六国史』に続く約1000年間の事件を年月日順に掲記。
1915(大正4年)、国書刊行会。『群書類従』に収められなかった諸家の系譜等。
1937(昭和12年)東京大学史料編纂所。出羽国平賀氏の1288〜1713までの文書(『大日本古文書』家わけ14所収)

註、本稿では文献の成立年代の明らかなものはその年代に、そうでないものは書かれた年代の箇所に記入している。

他の参考資料

『国史文献解説』遠藤元男・下村富士男 昭和32年 朝倉書店
『史籍解題辞典』竹内理三・滝沢武雄 昭和61年 東京堂出版

「山名」に関わる調査分析

山名一男（石川県・源平合戦「くりから峠の戦い」
があつた旧倶利伽羅村生まれ）

1. はじめに

筆者は根っからの理系の人間であり、これまで歴史や文化には興味がなく、山名氏に關しても「応仁の乱」程度のことは学んだことはあつたが、全国山名氏一族会の活動には関与してこなかった（會員ではあつたが）。

しかしながら、歳を重ねるにつれ、「山名氏」とは何者かが気がかりとなり、平成24年度山名会再興総会から参加している。これまでの会員の諸先輩の努力により、山名氏が日本の歴史の中で重要な役割を担ってきたことを明らかにし、日本各地にいる子孫や関係者との連携を深めていることに敬意を表する。

今回の報告は無知な筆者のおさらいも含めて、「全国山名氏一族会」で何気なく使っている各種の言葉の意味を理解することに加え、「山名」に關するデータについてインターネットを活用して調査分析を行った。読者にとっては当たり前のことばかりかもしれないが、筆者の頭の整理を含め、本文をまとめてみた。何かの参考になれば幸いで

2. 「氏」という言葉について

氏について基本的な由来について以下に要約する。

（1）氏（うじ）

「氏」は血族、親族を表す。天皇に賜つたものもあるが、地名や職業に由来するものも多い。

〈参考〉

山名氏の本姓は源氏。家系は清和源氏の一家系である名門「新田氏」の一門。新田義重の庶子「三郎義範（または太郎三郎とも）」が上野多胡郡（八幡荘）山名郷（現在の群馬県高崎市山名町周辺）を本貫として、山名三郎と名乗ったことが呼称の始まりとされる。

（2）姓（かばね）

「姓」は朝廷が各氏族や個人に与えた「位」を表すもの。

（3）名字・苗字

「名字」は、同じ氏名を名乗るものが各地に増

え、「氏」を区別するために領地の地名をとるなどして名乗るようになったもの。なお、現代では氏、姓、名字（苗字）の区別はなくなっている。

3. 「清和源氏」について

源氏の系統の一つで、武家の名流。清和天皇の孫である経基王（源経基）に始まるとされる。経基の嫡男「満仲」摂津守となり武士団を結成したことにより武家として栄えることとなった。子孫が各地で栄えたため、地名を付して「摂津源氏」「河内源氏」「美濃源氏」のように呼ばれることとなった。源頼朝や足利尊氏は河内源治の流れから出たもの。

天皇から賜った氏族のうち、特に繁栄した源氏、平氏、藤原氏、橘氏を「源平藤橘（げんぺいとうきつ）」という。強大な権力を誇った一族であり、その氏の広がりや名字の誕生につながったためにこのように呼ばれる。

「源氏」は嵯峨天皇が皇子たちの臣籍降下の際、皇室と「みなもと」を同じくするという意味からその氏を与えたのに始まる。その後臣籍降下の際に「源」氏が与えられることが多くなり、臣籍降下された天皇の名を付して呼称される。断絶したものも含め、21の系統があるとされる。嵯峨源氏や清和源氏などである。

4.

現代苗字ランキングの中での「山名」の位置付け

日本人の名字（苗字）のほとんどが「源平藤橘」から始まったと言われ、苗字辞典等には四氏族からの流れを示す記述が並んでいる。苗字の電話帳掲載数（調査年は不明）で調べた結果によると、「山名」は1703件があり、電話帳掲載数の順位は1763位である。参考までに日本の現代苗字ランキングを以下に示す。

順位	苗字	電話帳掲載数
1位	佐藤	375,150件
2位	鈴木	328,415件
3位	高橋	273,259件
4位	田中	252,892件
5位	伊藤	209,064件
6位	山本	205,841件
7位	渡辺	205,442件
8位	中村	200,789件
9位	小林	196,666件
10位	加藤	165,014件
1763位	山名	1703件

5. 戦国武将の名字の中の「山名」について

珍しい名字ランキンが調べられ、「山名」は「戦国武将の名字」の中に位置付けられ、珍しい順位は16位である。そのデータの中では全国順位は1768位で、約9,200人が「山名」という名字を名乗っているとしている(調査年は不明)。調査対象は、電話帳データをもとに世帯が確認できるもののみを集計している。順位は人数の少ない順(珍しい名字)を意味する。参考までに珍しい「戦国武将名字ランキン」を以下に示す。

順位	名字	全国順位	全国人数
1位	長宗我部元親 ちようそかべ ありな	66, 327位	約20名
2位	藤名盛氏 ふじな せいし	60, 350位	約30名
3位	豊臣秀吉 とよとみ けいき	46, 607位	約50名
16位	山名裕豊 やまな ゆうほう	1, 768位	約9, 200名

6. 都道府県別「山名」の電話帳掲載数ランキン

都道府県別に山名のランキンを石川県について調べてみると、1407位で32件が検索され

る。各県の傾向を知りたく、県別に検索を行ったが、十分にデータを取得できなかった。検索できた数例を示すと、北海道では1659位で111件、岩手県では1853位で17件、群馬県では2505位で14件、島根県は1713位で12件が検索された。その際の日本全体での「山名」の電話帳掲載数は1707位で2176件という数字が検索される。このデータは前章の掲載数順位と幾分数字が異なっている。本章でのデータは、全国電子電話帳CD-ROM(2002年版)からの抽出によるとされ、大元のデータはNTT発行のハローページ(平成13年(2001年)発行)に従っている。用いたデータが幾分古いとは言え、ほぼ現状把握ができ、今日における「山名」という名字の大体の位置付けの傾向を知ることができる。

7. 全国の町名に係る調査

山名町(ヤマナチヨウ)についてインターネットを用いると、下記の3件が検索される。

- (1) 群馬県高崎市山名町
- (2) 静岡県袋井市山名町
- (3) 京都府京都市上京区山名町

(1) の高崎市山名町については山名氏の発祥の地である。
(2) については山名郡袋井宿、川井村、木原

村、土橋村、西田村、広岡村「一部」が合併し、山名郡山名村が発足した。町制施行により山名郡山名町（1889）となり、磐田郡が山名郡を編入し、磐田郡山名町（1896）となる。市制施行（1958）により、現在の袋井市山名町となっている。

（3）については山名宗全の邸宅がこの一帯にあったことが名前の由来となっている。また余談ではあるが「応仁の乱」で、西軍を率いた山名宗全がここに陣を構えたことが、「西陣」の名前の由来である。

8. 全国の小学校に係る調査

次の2件の小学校が名称として検索された。両校とも地名が学校名となったと推定される。

（1）扶桑町立山名小学校

〒480-0105 愛知県丹羽郡扶桑町南山名山神浦152

（2）袋井市立山名小学校

〒437-0122 静岡県袋井市春岡684番地

9. まとめ

「山名」という名称をインターネット検索により各分野で調査分析した。十数年前と異なり、今

日では個人情報に関わる保護法が出来、正確な山名氏に関するデータを入手することが困難な時代となつていく。今回の調査では、山名氏とゆかりのある「寺」、「神社」、「城」等については触れなかった。現段階ではデータが不十分であり、より正確な情報を得てから報告書を投稿したいと考えている。



火牛の計（「倶利伽羅峠の戦」）を再現したモニュメント（筆者ご提供）

— 親から子や孫へ

年々歳々花相似

語り継ぐべきこと —

歳々年々人不同

— 乗山専念寺住職 山名義範

一、行く雲

太陽、月、星たち、空ゆく雲は悠久の時を刻む。月の年齢は約四十五億年。地球は四十六億年。創世紀以来、動植物が今日まで生き残るには大きくて強いものだけではない。小さくても智慧のある種族が残った。

山名氏には八百年の歴史がある。栄枯盛衰は世の常、個人としてはつましい暮らしの中に「明るい明日の来る」のを信じて生きて来た。また、「時の試練」に耐え、八百年も存続してきたのは組織としての叡知が結集されたからである。

法雲寺のご住職吉川廣昭氏が但馬から遠路赤穂の専念寺まで来て頂いたのがご縁で山名会の存在を知る。

山名会で学んだことを天安二年から保延元年まで記す。

天安	二年	858	第五十六代清和天皇即位、在位十八年。
貞観	十六年	874	貞純親王生。
延喜	九年	909	六孫王經基初代臣籍、源姓を賜う。
安和	三年	970	源満仲、摂津守。多田氏の始。
寛仁	四年	1020	源頼信。河内国壺井に拠る。河内源氏の始。
寛治	五年	1091	源義家、後三年の役で大功。関東の武士多く旗下に属す。
永久	五年	1117	新田義重生。
保延	元年	1135	山名義範生。（義重長男新田太郎）

山名会に入会して多くの山名一族の方々に巡り会えた。播州赤穂の山名についてもいろいろ勉強させて頂いた。有り難いことだ。

専念寺の由緒は父から聞かされていたが、多くを伝える間もなく私の二十一の春の未明、その父も他界した。苦しい息の中で『人身受け難し——』と呟きながら。

私は専念寺開基以前のことが分からない。「周世の専念寺はどこから来たのか」。来年長男に住職の座を譲る。山名会で学んだことを息子や地域の人に伝えたい。

山名氏が群馬県高崎市山名町から来たこと。その後『応仁の乱』を経て播磨へ。群馬県鎌倉郡↓京都↓但馬↓播磨↓播州赤穂へ。この間五百年はかかっている。

私の何故はまだまだ続く。「但馬から何故赤穂の周世へ来たのか」。「何故小隊（家臣36名）だけなのか」・・・まだ分からないことが多い。

二、流れる水

『春風吹大地緑水長流』（雪解けの一滴が大地を潤し大河になる）。広州を旅した時、とある農家の門に掛けられていた看板である。大自然の中に生かされている人間。悠久の時間を刻む水の流れは村から町へと様々な恵を与え大海に注がれる。

現代は、人間の都合で木を伐採し、山を削り、田畑を埋めるなど、自然との共存を疎かにしてきた。その結果、異常気象による災害が地球規模で起きている。いつの時代も変えていいものと変えてはいけないものがある。

冒頭の詩のように「春風が吹いて山の雪が解け、その一滴が大河となり田畑を潤す。村里では農作

業に余念が無い。人を癒し、文化を育む」。

山は一日にしてならず。山になるには一本の木を植えても百年はかかる。「景観十年、風景百年、風土千年」の言葉の持つ意味は重い。地球も人類も、過去、現在、未来へと続いて来た。自然を今以上人の手によって壊してはならない。

九月八日、三十八年振りの中秋の名月を見た。

『なぜあんなにも月は美しいのだろう。なぜだ？ たぶん、月に持主がいらないからだろう』（井上ひさし「芭蕉通夜舟」より）

山名会に入会して十九年、沢庵和尚（1573～1645）が豊国公に贈った言葉を息子らに伝えたい。

山可山非常山

名可名非常名

有山名之名

眷其旅派

多田源氏后裔

前因州大守也

大守謂誰

東林院殿徹菴公也

山は山でもただの山ではない

名は名でもつねの名ではない

ここに山名という一族がある

その棟梁は

多田源氏の後裔

さきの因州大守である

大守誰ぞ謂わん

東林院殿徹菴禪高公なり

山名家譜より

『ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。』

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。

世の中にある、人と栖（すみか）と、またかくのごとし。』

私は暇にまかせて徒然草や方丈記、枕草子等の古典を読んでいる。千年前に書かれた文章と思われるにいくらい新鮮である。会誌「山名」が継続して発刊できることを祈念しつつ。

ゆきゆきて倒れふすとも萩の原 はせを

了

文鶴画「梅に鶴」奉納

法雲寺檀家の方を介して、吉田二雄氏（香美町小代区）から、村岡山名七代・義徳（文鶴）公筆の掛け軸・「梅に鶴」（口絵参照）を御寄進頂きました。寄進頂いた吉田氏の話では「骨董好きの曾お祖父さんが、明治の頃に入れた物らしい」と言う事。多分、廃藩置県後、陣屋を片付ける際に家財処分の一環で手放されたものが、吉田家へとたどり着いた物と想像しています。

七代義徳公は筑後柳川藩第五代・立花貞俣の八男で、村岡山名六代・豊暄公の婿養子として縁組。

義徳公は文武に秀で、特に絵画の才に恵まれていたと伝え聞きますが、山名蔵所蔵の「猿尾瀧観瀑図」が唯一目にするこの出来る義徳公筆の画でした。今回「梅に鶴」の御寄贈を得て、義徳公の画才の一端を感じることが出来る史料が増え喜んでいます。尚、戴いた軸の裏書きには

梅に鶴の画 文鶴の筆

村岡殿様山名公七代目

山名鞞負源豊貴 雅号文鶴 明和三年

狩野派大家加藤文麗に学ぶ

と有ります。「豊貴」は義徳の旧名。明和三（1766）年は村岡山名七代として家督を相続した翌年になります。シンブルな絵柄からは、新藩主としての清新な志が浮き出ているような気がします。

また、裏書きには相国寺「龍虎図」等を描いた狩野（加藤）文麗に師事したと記され、義徳公も狩野派の流れを汲むことが分かります。文麗の弟子には谷文晁等も居り、但馬村岡に在りながら画壇とも関わりを保っていたであろう義徳公の足跡に興味を惹かれます。

山名会の幟作成

草山常任理事（相模原市）の御発案とお世話で山名会の幟を作成して頂きました。幟の図案は平

成の始めに壺井八幡宮に奉納した物と同じになり
ます。(巻頭写真ご参考)

10本制作した内、8本を光臺寺(高崎市山名)
に納め、2本を事務局で預かっています。行事や
活動の際には目立つ場所に掲げて山名会のアピー
ルに活用できればと考えています。

編集後記にかえて

玉稿を賜りました皆様のお陰で「山名第6号」の編集
を終える事が出来ました。ご協力誠に有り難う御座いま
す。

今回は山名年浩会長様より、永年の研究の成果である
「山名氏年表」(前編)をご提供頂きました。前回の「清
和源氏諸流略系図」に引き続き、山名氏研究には欠く事
の出来ない史料を制作、公開頂き誠に有り難い限りです。
引き続き後編もあると言う事ですので、どうか皆様お楽
しみに願います。

宮田副会長様からは「明徳の乱」に到る裏事情をご寄
稿頂きました。「山名氏の強大化に対する牽制」により
山名一族内が分裂し「明徳の乱」となったと理解してい
たのですが、余りにも欲深い將軍の謀り事が、下地に
あったとは正に驚きです。

山名義範理事長様からは、心洗われるエッセイを戴き
ました。自然の営みの仲でしか生きていく事が出来ない
人間、人間自身が自然の一部分である事を忘れて居るの
でしょうか？

山名一男理事様からは、ユニークな視点からの「山名

にまつわる」文書と「火牛の計」の写真を送って頂きま
した。今後も理事様らしい視点からの一文よろしくお願
い致します。また確かに理事様ご指摘のように「山名姓」
の方の調査など出来にくい世の中となってきました。今
後の会員確保は会員諸氏からの「ロコミ」が益々重要と
なります。山名姓の方にお出合いなさつたら、「山名会」
の事も是非ご紹介お願い致します。

三王紀将様にはご無理を言って「壺井八幡宮修理事業」
に関する思い出話を書いて頂きました。また当時の貴重
な修理風景を写した写真もアルバムごとご提供頂きまし
た。今後も会の重鎮としてご協力どうかよろしくお願
い致します。

なお、掲載文章の誤字等は、編集時に発生致したもの
かと思えます。誤り等御座いましたらご指導お願い致し
ます。

会誌「山名」第六号

平成二十六年十一月二十日発行

編集・発行

全国山名氏一族会

兵庫県美方郡香美町村岡区
村岡2365 山名氏史料館内

(事務局 吉川廣隆)

印刷 岩見印刷(株)

兵庫県豊岡市日高町土居67-1

